

教職大学院 Newsletter No. 137

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2020.8.1 (公開版)

学校を創り 育て、学びを創り 育てる

坂井市立丸岡南中学校 校長 柳原潤一郎

本校は平成18年、過大規模であった丸岡中学校のマンモス化解消を図るために分離新設された学校です。生徒数が1000人を超える状態が長く続く中学校の二校化は、旧丸岡町の長年の課題でした。基本計画の策定にあたり、いかに魅力のある学校を創るかについて、教職員との綿密なヒアリングや意見交換を行いました。教職員からは「ゆとりある明るい学校」、「生徒とのコミュニケーション空間」といった施設面の要望とともに、「主体的に学習を進める力を養う」、「教科の特色や魅力を伝え学ぶ意欲を高める」、「機器の充実による多様な学習形態」という学びの視点からの意見が寄せられました。マンモス化解消により「3学年全ての生徒の顔と名前が一致し、生徒の様子を全教員で把握することができる学校が創れる」という意見もありました。生徒・地域住民・PTAに対してもアンケート調査を実施して意見や要望を集約しました。生徒からは、きれいで明るいトイレ、屋根付きの駐輪場、温かい給食などが要望され、「気持ちよく学校生活を送ることができる、ゆとりと潤いのある生活環境」が必要とされました。行政側がこれらをうまく融合させて基本計画を策定し、建築側が様々なアイデアを駆使して設計し、意見を見事に反映した校舎となりました。

少子化の時代に、巨額の予算を投じて中学校を分離新設するというだけあって、地域の方々の期待も大きいものでありました。「地元の自然や風土、歴史を生かした地域に根ざした学校」、「地域の人たちとの交流の場となる地域に開かれ、地域と連携する学校」の2点が学校づくりの指針として盛り込まれています。これを具現化するために、夏休み中にPTAと学校が主体となって地域住民を学校に招待する「夕涼み会」を開催してきました。フィナーレには打ち上げ花火まで揚がる本格的なイベントで、現在では文化祭と併せて「南中秋まつり」として継承されて

おり、昨年は700人の地域の皆様に来校いただくことができました。

開校以来、恵まれた設備と地域環境を生かした生徒の学びについて自主研究を継続してきました。教科の特色や魅力を最大限に伝え、自主的に学ぶ意欲を育むために、教科センターを併設した教科教室型の学校運営を採用しています。開校時は「教えやすい学校から学びやすい学校へ」をテーマに設定しました。学びやすい学校づくりの一例として、単元別評価による通知表と教科面談があげられます。本校では各教科とも単元別に観点別評価を行っています。学期はじめに評価方法や単元別の観点を、あらかじめ生徒に示し、単元毎に評価して通知表を作成します。学期末には全ての教科担任が生徒と面談し、頑張った点、不十分だった点を言葉にして具体的に説明します。観点の見直しや面談のための時間の工夫が必要となりますが、次学期の意欲を高めるための大切な取り組みであると考えています。

授業づくりにおいては一貫して「学び合い」をテーマとし、少人数グループによる生徒同士の学びを育てる実践を行ってきました。毎月1回「研究の日」を設定し、部活動を中止にして自主研究の時間に充てています。職員をスクエア毎の4つのグループに

内容

巻頭言	(1)
スタッフ自己紹介	(2)
院生自己紹介	(5)
ミドル・マネジメントコースだより	(21)
6月ラウンドテーブルをふり返って	(27)
令和2年度 教員免許状更新講習 — 県と大学との協働4年目 —	(31)

分け、教科の枠を超えて指導案の検討、公開授業参観、事後研究を行います。各グループには福井大学連合教職大学院の先生方にも参加していただき、毎回貴重な助言をいただいています。

特色ある取り組みとして、スクエア制と名付けた異学年集団による道徳があります。これまでは特別活動的な位置付けで実践してきましたが、昨年度からスクエア道徳を教科としての研究に発展させました。一つの価値について1・2・3年生が混在する5～6名の小グループで思いを交換します。3年生がファシリテーター役となり、学年差による価値観の違いを引き出したいのですが、本音を引き出す手法について、一層研究を深めていく必要があると感じています。「研究の日」の協議は、近年の働き方改革も念頭に、勤務時間内に終わることを基本にしています。

今年は新型コロナウイルスの影響で、予定していた研究がスタートできませんでしたが、このような機会だからこそ試すことができたことがあります。臨時休業中の学習対策として、教科書に沿った学習を進めるための動画教材を作成しました。互いに他教

科の出来を参考にしながら工夫を重ね、3週間にわたり全教科部会が全学年を対象に65本の動画を作成し、生徒に提供することができました。今年はじめて教壇に立つことになった初任者をはじめ、教職大学院からインターンとして本校に配属された荒木さんにも、さっそくこの制作に携わってもらうことができました。未だ見ぬ生徒に向けた丁寧で温かい語りかけが印象的でした。中には今回の経験を生かし、学校再開後も全ての時間でパワーポイントを駆使した授業を行う教員も出てきました。政府が進めるGIGAスクール構想に伴い、今後ICT機器活用による多様な学習形態が必須となりますが、慌てることなく対応していけるものと確信しています。

生徒にとってこの一年はかけがえのない一年であり、私たちの仕事も一年一年が勝負と言われています。生徒一人一人の可能性を引き出し、自己実現を果たすためのベストな一年となるよう、今、この日この時に力を尽くせる教師集団でありたいと考えています。今後とも教職大学院との連携・協働が一層深まりますよう、よろしくお願い申し上げます。

スタッフ自己紹介

学びは続くよどこまでも



福井大学連合教職大学院コーディネーター/合同会社
楽しい学校コンサルタント Second 代表/金沢大学附属高校カリ
キュラムアドバイザー/富山国際大学附属高校コンサルタント/ベ
ネッセ次世代教育アドバイザー **前田健志**

皆様、始めまして。今年度から福井大学連合教職大学院のスタッフとしてお世話になります、前田健志と申します。

昨年度まで、教職大学院生として、皆様と一緒に学ばせていただいております。長期実践研究報告の執筆が、昨日のように思い出されます。

教職大学院での2年間は、何と言っても対話とリフレクション。毎月、色んな方と対話し、自分にはない視点に触れ、かつ無意識の自己と対話する。特に、後者の方は、自分が話しているんだけど、今までの自分ではなく、新たな自己の発見がありました。長期実践研究報告なんて、書く前の自分と書いた後の自分が全く違う、そんな感覚になるくらい、自己変化させていただいたなと思います。また、自分の人生を変え

たり、これからはずっと大切にしていきたい本3冊にも出会いました。『コミュニティ・オブ・プラクティス』『学習する組織』『プロセス・コンサルティング』の3冊です。すべて、教職大学院の課題図書、あるいは勧められた本なのですが、専門書嫌いの私が、時間を忘れて没頭するくらいでした。この2年間の学びは、何度も言いますが私の人生を大きく変え、今の仕事にも強く関係しています。

2年前の2019年4月に“楽しい学校コンサルタント Second”として起業したのですが、それまでの13年間は、金大附属高校などで13年間教員生活を送っていました。自分はなぜ「教師」になったのか、目的達成のために「教師」でいる方がいいのか、子どもたちのためにこれからどうするべきなのか、これらの

問いを抱えながら教職大学院に来て、「誰もが楽しく学びあえる場としての学校にするためには、先生方や学校の良さを理解して伴走するサポートが必要だ」という結論に至り、起業しました。もちろん現場・生徒たちと学びあうのが大好きだったので、個人的にはつらい決断でした。しかし、目の前の生徒たちが親になって、子どもが学校に通うときには楽しく学んでほしい、そのための最も効果的な時間の使い方はこの選択だと思い、決断しました。自分の子どもが「学校が楽しくない」と言い出したのも大きな要因です。しかし、先生方の大半は努力家で且つ子ども思いです。決して怠けているから、学校での学びがつまらないものになっているのではない。先生同士が楽しく自分の得意なことを活かしあいながら働ける環境づくりをサポートすれば、子どもたちも楽しく学びあえるのではないかと、そう考え、今は外部から先生たちの「やりたい」をサポートしたり、強みを活かしかける職場づくりなどをサポートしています。フィンランドでは、「先生のサポート(先生の先生)」の必要性を認知し、専門職として養成課程まであります。養護教諭のように、各学校に公費で配置され、日々先生方のサポートやマネジメントをしています。こうした状態を日本でも作り上げたい、これが大きな企業理念です。違う言い方でいうと「先生の定義の拡大」でしょうか。私自身、特定の学校からは退職しましたが、先生を辞めたつもりはありませんし、目的も教員一年目から変わりません。「全ての学校を誰もが楽しく学びあえる場にしていこう」「誰もが生まれてきてよかったと思えるような社会にする」大それたことかもしれませんが、自分の人生をこれにかけたいと思っています。

起業してから1年3か月が経とうとしていますが、皆様のおかげで、本当に多くの学校からご依頼をいただいております。福井県では、羽水高校、金津高校、勝山高校、石川県では大聖寺高校、金沢西高校、金沢錦丘高校、金沢二水高校、金沢高校、小松大谷高校、富山県では富山国際大付属高校、氷見高校など、北陸だけでもたくさんのご依頼をいただいております。

何よりありがたかったのが、退職した職場である金沢大学附属高校からのご依頼です。普通は退職した人間をすぐ外部アドバイザーとしてなかなか依頼などしないと思います。当然、僕自身はやめたからと言ってどうでもいいと思っているわけではなく、9年間も働いた職場ですから、思い入れは強いです。ただ、世間一般的には、やめた人間に対してプラスのイメージを抱きにくいのではないのでしょうか。しかし、金大附属高校は、そういったことは一切なく、必要とし、仲間として「カリキュラムアドバイザー」の依頼をしてくれています。同じ職場ではなくても、同じ志の仲間、広い意味での「同僚」、そういった関係性を、続けていただいています。本当にありがたい限りです。

福井大学連合教職大学院で学びあっている先生方も、同じように職場のちがう「同僚」だと思っています。同じ大きな目的を共有し、共に悩み、アドバイスしあい、実践しあう、そんな関係だと思っています。ぜひこれからも、教職大学院の皆様と、楽しく学びあえたらと思っています。私自身、仕事柄全国各地の学校や先生方と仕事でやり取りしていますので、何か気になることや全国の実践例など、随時、情報提供していければと思っています。

これからもどうぞよろしくお願いいたします。



先生方との新たな結びのスタート

福井大学大学院連合教職開発研究科 特命教授 **福島 昌子**

はじめまして、4月1日から連合教職大学院の教員として着任しました福島昌子(ふくしま まさこ)と申します。

主に東京サテライト校の企画・運営とサテライトを拠点とする院生の方々のカンファレンスを担当しております。この東京サテライトは、今年の令和2(2020)年4月に設置され、福井大学でも組織的なサテライトは初めてのことであり、連合教職大学院

にとっても教師教育支援組織の初の分校となります。その運営に携われることを大変有難く光栄に思っております。3月までは、千葉県のある県立大学に籍を置き、教育学の教員として、教職課程科目(教職論、教育学概論、カリキュラム論、生徒指導論、特別活動論、教職実践演習などの10科目)を担当しておりました。いわゆるこれから教員を目指す学生への専門職としての学問と技術、そして実践力を身に付ける教育を担う仕事をしておりました。そこでは、研究者教員と

して在職しておりましたが、福井大学では実務家教員として採用していただいております。それというのも、大学の教員になる前は、中等教育学校の副校長をしていたからともいえます。

はじめ東京都の高等学校の教員として採用され、20代後半に国立大学附属中・高等学校に異動となりました。もちろん退職しての異動です。それというのも、高校を設置している国立大学附属の教員は大学籍として採用されるため、公立学校の教育委員会とは一切無縁の関係にあります。そのため一旦正式に退職をしなければ移ることができませんでした。では、何故、異動という言葉を使ったのか。それは、ある一定期間で東京都の国立大学附属と教育委員会の間で人事交流が行われていた時期がありました。そこで、実際に交流人事が開始される前に試行的にお試しの人事があり、そこで指名されたのが私でした。したがって、交流人事第一号ではなく、第0（ゼロ）号になるといったところでしょうか。そして、東京大学教育学部附属の教員となり、公立学校とは異なった教育実践研究にかかわることになりました。

公立学校と国立大学附属学校とで、大きく異なることは、生徒指導、教科指導、学校運営はみな同じですが、それらすべてに実践研究が伴うということです。また東京大学の教育学部は教員養成系の学部ではないため、教科教育の「教育」の学部ではなく、「教育学」の学部であり、学校教育というならば教育課程（カリキュラム）と評価が主な専門になります。そのため、SSHやSGHなどの研究とは異なり、地味ではありましたが学校を支える根幹といえるカリキュラム研究の研究開発が主なものでした。その次に協働や探究といった授業研究がありました。そして、その一方で学校全体で行う実践研究とは別に、教師一人一人がテーマをもって個人で研究する義務が伴っていたため、公立学校から異動した私は、何をしたらよいのか、研究とはそもそも何ぞやの世界からスタートし、はじめは何が何だかわからず悩み苦しんだことを記憶しております。そのはじめがあったせいか、次第に個人として「なぜ」「どうして」「どのように」

から始まり、研究校として「やらなければならないこと（義務）」「やれること（可能性）」学校として「やりたいこと（挑戦）」へと変わっていき、学校改革の視点から研究部長、副校長（国立大学附属の副校長は実質の校長）に結果として就いておりました。

その中で私が連合教職大学院の教員になろうと思った種のきっかけは、附属の副校長時代にこちらの教職大学院にお世話になったことが大きく影響しています。本大学院に入学を決めた理由は2つです。1つは、東京、沖縄離島の公立小・中学校の指導講師を通年にわたりさせていただいていたこともあり、改めて「学校、授業、教師の意味を問い直す」ためにも、福井に来れば職場を休まずとも地域や学校種の異なった多くの先生方の声が聞けると思ったことです。もう一つは、学校は管理職が変わらなければ、学校改革はなし得ないと考えたからです。そこで、管理職自ら外に省察的なコミュニティの場をもち、そしてその場を通して地域や分野を超え、教師同士また管理職同士が協働探究し、共に知恵を共有することで先生方や学校を支え、真の教育改革ができると考えたからです。

このような諸々の経験を積み、そうこうしているうちに、今、福井大学連合教職大学院の教員として、先生方と共に学び合う環境に身を置かせていただいております。東京サテライトでは、福井と同様に、ここを拠点に全国の先生方に向けて、個々の能力や技能の獲得の問題、それへの手立ての問題、そして教師としての専門職性の形成とそれを支える同僚性、新しい社会関係を教師自身が結んでいける新たな学校研修システムの可能性を探ってまいりたいと考えております。また、それが組織化されることは、実は全国の子どもたちの豊かな成長を支える基盤になると私は信じております。NL135号でも東京サテライトの紹介をしましたが、是非、他の拠点の院生の方々にも東京カンファレンスにご参加いただいて、さまざまな地域の先生方と共に学び合えることを心待ちにしております。

院生自己紹介

久保田 美千代 くぼた みちよ



ミドルリーダー養成コース 1 年、久保田美千代です。長野県岡谷市立川岸小学校で理科専科をしております。岡谷市は長野県の中心、諏訪湖畔に位置しており、数えて 7 年に 1 度の御柱祭が行われる地域です。川岸小学校がある川岸地区は岡谷市西部、天竜川沿いにあり、「シルク岡谷」を築いた片倉兼太郎の生家は校区内にあります。歴史も古く、地域の方の地元愛が溢れる川岸小学校に勤務して 5 年目になります。前任校までは学級担任をしており、産育休を経て職場復帰する際に専門である理科専科として地元岡谷市に異動になりました。

「省察」「協働」「探究」…半年前の私にとって、これらの言葉は日常的ではありませんでした。聞いたことがある単語ではありますが、日常的ではなく、「なんとなくこういうことだろう」という程度でした。それが、今ではこれらの言葉が私の日常になりつつあると感じています。

教育学部出身ではなく、いわゆる「研究校」に勤務した経験もない私は、今まで自分の感覚だけをたよりに授業をしてきました。子どもが帰った教室で「今回の問題は考えにくかった。」「今日の課題の言葉は分かりにくかった。」「実験と考察がつながっていません。」「あの子の考えをもっと深めてあげたかった。」と、落ち込むことばかりでした。それでも、「そういうことか!」「分かった!」と目を大きくして嬉しそうな声を上げる子どもの顔をたくさん見たいと思い、教材研究を重ねてきました。自分なりに目の前の子ども達に真剣に向き合ってきたつもりではありますが、自分の考えている方向性は正しいのか、本当に子どものためになっているのか、自分の実践に不安を抱え過ぎてきました。この不安は「教育学部じゃなかったし…」という思いが心の中にずっとあったからだと思います。そんな私ですから、3 年前の 2 学期慰労会で学校長に「久保田先生、研究主任どう?」と言われた時も「無理です!」と即答しました。それでも当時の学校長は私に研究部会主任を任せてくださり、挑戦の 1 年が始まりました。

この時の研究部会は教科となる前の「道徳」でした。郡内の先生を招いての研究授業もあり、専門教科の

理科以上に道徳について学び、部会の先生方とたくさん考え合いました。授業学級の授業を何度も参観して授業者の先生と語り合ったり、授業の資料にある「木曾馬」に会うために家族を引き連れて片道 2 時間のドライブをしたりしました。楽しみながら研究を進めましたが、「これでいいのか。」という不安は消えませんでした。

研究部会主任としての 1 年間を終え、昨年度からは全体の研究主任となりました。昨年度は学校全体を見ること、職員集団を動かすことを考えていました。子どもの様子を捉え、学校としての課題や成長の芽を見つけ、言語化すること、自分の考えを周りの先生方へ伝える難しさを感じました。そして「私はこうしたいのに、なかなか動いてくれない。」というもどかしさを感じることも多くなりました。そのもどかしさを消してくれたのは、昨年度参加した、実践研究福井ラウンドテーブル spring sessions 2020 でした。「組織を動かすためには」や「協働で」という言葉が多く聞かれ、様々な地、異なる校種で実践を積み重ねている先生方と話をする中で「職員集団全員が同じ意識でいることは無理だ。それでも思いを伝え、一緒にやってくれる雰囲気を作っていく。子どものためにという願いはどの先生も一緒だ。」ということに気づくことができ、心が軽くなりました。

春、合格通知や学生証が届き、新しい一歩を踏み出すことに少しの期待と大きな不安を抱えていました。初めてのカンファレンス。何を語ればいいのか、それ以上に私はこの 2 年間で何を学んでいくのか、教育を学ぶ機会をいただけたことはありがたく感じていたものの、明確な道筋が見えないまま 4 月のカンファレンス準備会を迎えました。しかし、カンファレンス準備会を終えた私は福井ラウンドテーブル spring sessions 2020 後のように、心が軽くなっていました。資料を読み、実践を聞き、教育の現状、今後を語り合うことが、自分の今までの振り返り、今の自分を見つめ直し、これからの自分を考えていくことになるのだと知りました。4 月からの 3 ヶ月間で私は今までの何倍も自分の教育観を見つめ直しています。そして自分が大切にしていることは「学びの主体は子どもである」ということだとはっきりと分かりまし

た。子ども主体の授業づくりについて考えを深める2年間にしたいと思います。

「教育学部じゃなかったし・・・。」と逃げに使っていた言葉はもう使えません。「私はこう考える。」と

自信をもって周りの先生と語り合えるようになりたいと思っています。そして目の前にいる子ども達、これから出会う子ども達に返していきたいと思っています。よろしくお願いします。



法土 明子 ほうど あきこ

はじめまして、この4月よりミドルリーダー養成コースに入学いたしました法土明子と申します。現在、神奈川県にあります私立カリタス女子中学高等学校にて国語科専任教諭として勤務しております。2年間他校で非常勤講師を経験し、本校での勤務は17年目になります。中学に6年、高校に8年在籍し、残り3年間は育児休業をいただきました。

専任になりたての頃はクラス運営だけで精一杯でしたが、勤めて3～4年経つ頃に当時いらした司書の先生の影響で、図書館との協働学習に大変興味を持ちました。協働について学べば学ぶほど、一人の力ではなしえない様々な授業の可能性を知ることができ、経験の足りない半人前な自分をこれまで多くの先生方が育ててくださいました。

しかし、自身の経歴を振り返ってみると、ここ最近では育児休業のブランクを埋めながらクラス運営と授業をすることだけに必死の日々でした。大学院で皆様のお力、パワーをいただきながらまた学び直したいと思っています。

大学院の入試を受けに新幹線に乗っていた頃、まさかこのような状況になるとは思ってもみませんでした。しかし、教育だけでなく社会が大きく変化するまさにこの時期に大学院で学べる意味の大きさを、日々実感しております。大学院ではzoomによる授業が4月下旬から試行の形から始まりました。自宅に居ながらにして北は北海道、南は沖縄の先生方、生徒さん達とお話する機会を沢山いただきました。ま

た、東京サテライトの先生方にも大変お世話になり、以前よりも多くの方と知り合いお話を聞くことができています。早くも感謝の気持ちで一杯になっています。先日の「ラウンドテーブル」では「ZONE E」に参加させていただき、“ニューノーマル”の意味を深く考えさせられました。ID一つで様々な場に飛ぶことができる「どこでもドア」の便利さと、でもそれは画面越しであるという少しのもどかしさと、それをうまく組み合わせてもっとよい形にできるのではないかと……と様々な魅力的な意見が飛び交う素晴らしい場に参加させていただきました。更にOECDのフランスから参加して下さった先生からは、“ニューノーマル”の中に日本の古い教育を評価して下さるエピソードを聞かせていただき、ここでは書き切れない発見、興奮、喜びが詰まった2日間となりました。

最初の2ヶ月でこれだけ沢山のことをいただいている、一体今後どれ程の出会いや発見が待っているのだろうとワクワクしています。一方で自分自身が皆様に何を報告できるだろう、皆様と同じ土俵に立つ何を求めているだろう、と不安にもなりました。自身の甘さや努力不足の部分を一番教えていただいているような気がしています。

勤務校は4月10日から完全オンラインの授業が始まり、6月末まで継続することとなりました。オンラインの授業開始は全国的にも早い方だったのではないかと思います。このようにいわば危機に対して“ニューノーマル”な動きに向け奔走したメンバーには、かつて教職大学院で学んだ教員が多く入っております。私も先輩修了生に続けるよう、努力して参りたいと思っています。



黒津 彰紀 くろつ あきのり

この度、福井大学連合教職大学院ミドルリーダー養成コースに入学しました黒津彰紀と申します。現在は横浜市立青葉台中学校に勤務しています。私が福井大学連合

教職大学院と出会ったのは2014年に行われたラウン

ドテーブルでした。当時、奈良女子大学附属中等教育学校で短時間勤務教諭をしており、同校でラウンドテーブルを行った際に、ラウンドをする楽しさを知りました。それから横浜市に採用されて6年間。ここに来るまでにたくさんの経験をさせてもらいました。

初任の横浜市立瀬谷中学校は、生徒指導困難校でした。日々も授業はもちろん大切でしたが、それ以上に生徒とのぶつかり合いの続く日々でした。特に最初の2年はそうです。しかし、生徒の話を聴く大切さ、そして生徒たちはそれぞれ多様な困難を抱えながら生きているということを感じることができた2年間でした。今振り返れば、最初にそうした生徒と接することができて良かったと思うのと同時に、もっとやれることがあったと悔しくなるときもあります。その悔しさがずっと胸のどこかに残り続けていたことが、大学院進学を決心を後押ししてくれたと思います。それから残りの3年は外部への問題行動が減った一方で、自分を責めるような形での苦しみを表現する生徒が見えてくるようになり、より一層生徒たちに真摯に向き合わなくてはならないことを教えられました。そして私が生徒に向き合って感じたことは、私一人ではどうしようもないことがあるということでした。自分一人の力に頼るのではなく、誰かの力を借りたり、自分自身の力を貸したりして、困難

へ向かっていく。そうしたことができるようにならないと感じました。そこで思い出されたのが、福井のラウンドテーブルの姿でした。互いが話を聴き合い、じっくりとその意味を問い直し、また捉え直しながら多くの人から元気をもらう。そしてそのラウンド内で生まれたつながりを大切にしながら自分の現場へと戻っていく。そんなつながりを自分自身でもっと創り出すことができたらいいなと思ったのが、大学院進学のかっけであり、学びたいものでもあります。

今年は新型コロナウイルスにより、例年とは異なることが多くあります。本校も多くの学校行事が中止縮小となっています。失われたものは多くあるかもしれない、けれどもそれ以上に多くの新しいものを創り出せるかもしれない。自分一人では無理だとしても多くの人と共にならそんなことができるかもしれない。そう考えながら、地に足をつけて一つずつ地道にこれからの大学院での学びを頑張りたいと考えています。これからよろしくお願いいたします。



伊井 昌彦 いい まさひこ

今年4月、連合教職大学院のミドルリーダー養成コースに入学いたしました伊井昌彦と申します。私

は富山石川の公立私立中高で国語教師として教壇に立ち、教育実践として総合的な学習・日本語ディベート・SDGsなど探究型の学習指導に注力してきました。

私の実践テーマは「授業づくりから学校づくりへ」です。これまでの教員経験から、教師個人の取り組みだけでは授業が自己満足に終始しがちで、学校全体の教育活動を活性化することはできないと理解しています。私が教職大学院に進んだ理由は、私自身が学ぶ立場に立ち返り、教員はもとより外部のステークホルダーと協働して実践・研究を重ねることにより、改革を推進するマネジメント力を養う必要があると考えたからです。

自身の学びをあらためて振り返ると、小学校時代に協働の原点があったように思います。期末テストなどで高点数を取れた時も学習の喜びを味わうことができましたが、フィールドワークをはじめ、登山やかるたづくり、民謡の越中おわら節など、常に仲間たちや先生との関わりの中でより深い学びが実現していたという印象を強く持っています。一人一人が状

況に応じて役割を変えながら一つのゴールに向かい、自分たちにしか迎れないプロセスでそれぞれが成長できたという点で、唯一無二の価値を持っていたと確信しています。

それゆえ、高校時代、大学進学に特化した学習、点数・偏差値によって（質的にも量的にも）分断された無機質な学習スタイルには正直魅力を感じませんでした。落ちこぼれた言い訳をするわけではありませんが、先生方は教科書や参考書の内容以外をほとんど語ってくれることはありませんでした。それゆえ私は、創作や音楽から得られる情動に身を委ねたり、今まさに直面している悩みや苦しみについて友人たちと語り合ったりしていた方が、今の自分にとって必要なことだと思っていました。三十数年前に学習者として感じていた高等教育に対する学びのフラストレーションを、教員として働く今、生徒にも与えているのではないかと。そう自問自答を繰り返しながらいかに生徒の学びを促すか日々試行錯誤しています。こうして振り返ると、私が教員として求めようとしているのは自身が小学校時代に経験した協働による学びの喜びなのだろうと思います。

私は各教科の授業づくりに「協働」の要素を取り入れる必要があると考えています。理想をいえば、以前他校の先生方と取り組んだ五教科横断型の授業がそ

のモデルケースとなっています。初めて出会う生徒たちと他校の先生方との協働経験は、教員生活 25 年の私に多くの学びをもたらしました。ただ、それは特殊な条件の下に成立した非日常のイベントであるとも言えます。大学院での実践の中心は、あくまでも勤務校での日常的な教育活動にあり、学校の教育目標と特色、教育課程を踏まえ、目の前の生徒たちを育てるために同じ職場の先生方と協働していく必要があります。

勤務校である魚津工業高校の生徒は、富山市以東の全地域より通学し地域産業の発展を担う工業人を目指して学業に励んでいます。教育目標「高い志をもって真理を探究し、技術を磨き、社会の進歩発展に寄与する工業技術者を育成する」にあるように、本校の育てたい人物像は地域社会で活躍できる「ものづくり人材」です。その実現を図る管理指導計画には「学習内容を見直し、指導法の工夫・改善を図り、ボランティア活動、国際交流活動、地域連携を推進する」とあります。また、教育課程編成の現状（問題点）と対策として、専門科目と共通科目との関連や多様な各教科・科目の効果的な編成、教科間の連携等が挙げられています。

しかしながら、実態として本校教育の実情は工場労働者の育成であり、教員の学習観・指導観は旧態依然としています。また、少子化を背景とした入試倍率の低下は本校の底辺校化に拍車をかけ、生徒の学習意欲や主体性の欠如が大きな問題となっています。理想と現実とのギャップは、学校に投げかけられた解決すべき課題に他なりません。地域に根差した公立の職業科高校である本校の存在意義に照らして、地域の労働力の質を確かなものとして保障するためにも、「新たな時代を創るものづくり人材」の育成を自身の実践目標としたいと考えています。

変化のスピードが速く、先の見通せない社会を生きる生徒の資質能力を育むためには、教員自身も自身の教育観に固執せず、生徒たちの多様な学びをデザインするという課題に取り組んで行かねばなりません。それは教員自身が主体的協働的に学ぶことと同義だと考えます。私はそうした教員チームをファシリテートしていく術をミドルリーダー養成コースでの学びを通して身につけるとともに、未来の日本社会に資する人材を育成するため研鑽を積んでいきたいと思っています。



宮崎 亮太 みやざき りょうた

2020 年 4 月にミドルリーダー養成コースに入学しました宮崎亮太と申します。宜しくお願い致します。大学院修了後に民間企業を経て教職に就きました。現在は関西大学中部・高等部に勤務しています。本校は大

阪府吹田市にある関西大学の併設校です。併設校は 3 つありますが本校は最も新しく、2010 年に開校しました。ICT 教育とプロジェクト型学習、国際理解教育に力を入れています。本校は定員が少ない小規模校のため、中高またがって授業を持つことが多く、中学歴史と高校歴史（日本史、世界史）をおもに担当しています。

私は学生時代に歴史民俗学を専攻し、各地の祭礼や習俗などを調査してきました。そのなかで、現代社会が失ったものや課題が村落社会の歴史や民俗を通して見えてくるようになりました。現代的な課題を捉えるためには、歴史を学ぶ必要と教科書的な知識だけではなく、現場に行かなければ学べないことがある。それを教員として生徒たちに伝えていきたいと思うようになりました。各地の史跡や博物館、美

術館などに出かけたり、最前線で研究をしている歴史学者の講演を聴きに行ったり、伝統芸能やクラシックの公演に出かけたりとできるだけ本物に触れて、それを教材化して、生徒たちが少しでも関心をもつ授業がしたいと様々取り組んできました。（はじめは見る専門だったのですが、自分で経験してみたいくなり、能楽や茶道、華道を習うようになりました。能楽は今でも続けており、ついには勤務校に能楽部をつくって生徒たちを教えるまでになりました。）本物に学ぶ大切さを教育にどのように活かすかが私の原点となっています。

各地に出かけて教材化するのに腐心していたなかで私は 2012 年度から 5 年にわたり、千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館の博学連携研究員として館蔵資料を教材化するというご縁をいただきました。博物館の先生方や職員の方、研究員仲間の先生方などから様々なアドバイスをいただいて、絵画資料や実物資料を用いて、生徒たちが発見した情報をもとに、歴史を読み解く歴史家の追体験を目指した授業を試みるという実践に取り組みました。博学連携研究員を続けるなかでチョークアンドトークの一斉講

義型授業ではない授業の手法に出会いました。また、何と言っても勤務校以外の自分と同じような課題意識を持った校種も勤務地もばらばらの先生方と実践を共有し議論できるすばらしさを経験できたことは自分にとって大きな財産となりました。

「越境」する醍醐味を知った私は博学連携関係のみならず、流行しつつあった「アクティブ・ラーニング」に関心を持ち、その関係の学会や研究会、セミナーなどに出ていくようになり、そこで知り合った先生方からより深く学ばせていただくために勤務校にうかがって授業を見学したり、関西以外の地域で行われる学会や研究会、セミナーなどにも参加したりするようになりました。

そのようなあちこちに駆けずり回っていたときに出会ったのが、数年前に福井大学で開かれたラウンドテーブルでした。ラウンドテーブルでは報告者のこれまでの実践や課題、展望などをメンバーの対話によって、深く掘り下げて共有することを初めて経験しました。私は社会・地歴公民科の教材や教具、授業手法を検討することには関心がありましたが、担当する先生やそれを支える先生方がどのような思いがあるのかなど正直あまり考えてこなかったもので、非常に新鮮に受け止めたことを覚えています。同時に私は何度か新しい実践を試みていましたが、省察

できるような内容ではない。つまり、自分の都合に合わせてカスタマイズした授業を単発で行っているだけで、学習者の視点や思い、資料を提供してくださる方の考え、自分の周りにいる同僚の意見などを踏まえた実践にはなっていないことに気が付きました。それからしばらくは、新しい授業手法や面白そうな資料に出会ったら、自分で考えて単発で実践してみることが数年くりかえしました。

しかし、あるときふと、このままで良いのだろうかと思うようになり、自分がこれまで教員として経験してきたことをじっくりと棚卸しできたらと考えました。そのことがきっかけで福井大学のラウンドテーブルのことを思い出し、もう一度学びなおして、これから先のキャリアに活かしていきたいと考えて教職大学院に入学しました。これからどんな先生方と出会い、どのようなことを自分のなかに取り込んでいくことができるのか、非常に楽しみです。

最後にこの場を借りて教職大学院に進学することに理解を示してくれた家族や管理職に御礼申し上げます。そして、支えてくれている人たちがいるからこそ、この2年を無駄にしないように、大学院で指導いただく先生方や院生の皆さんから謙虚な姿勢で一つでも多くのことを学びたいと思います。何卒よろしくお願いいたします。



前川 壽人 まえがわ ひさと

はじめまして。今年度より学校改革マネジメントコースに入学しました、前川 壽人（まえがわ ひさと）と申します。

私は、昨年度より福井県教育総合研究所の「マネジメント研修」を受講し、事前履修として教職大学院の夏期、冬期の集中講座、およびラウンドテーブルに参加させていただきました。1年間という短い期間ではありますが、よろしくお願いします。

今年で採用から19年目を迎えました。新採用は旧武生市の武生第一中学校でした。そこで偉大な先輩方にご指導いただきました。今思えばそこでの経験がその後の理科教員としての人生を支えてくれたと思います。その後、校種が変わり、現在は勝山市立成器南小学校に勤務しております。本校での勤務は3年目。生徒指導主事を担当しています。

これまでの勤務校では自分より年上の教員がたくさんいました。校長先生をはじめ、たくさんの先輩方に教え守られながら自分の仕事に集中できていたように思います。学級経営で失敗しても学年主任がフ

ォローしてくれました。保護者対応に行き詰ると校長先生、教頭先生と一緒に対策を考えてくれました。授業研究では先輩方が様々なアイデアやテクニックを見せてくれました。そんな恵まれた環境で年を重ね、気づけば自分も中堅と言われる年齢となりました。ここ数年で自分より年下の教員が増え、体育主任や生徒指導主事、研究主任といった役どころを務めるようになりました。当然ながら学校全体を見渡し、流れを作り、先生方に指示し、お願いし、外部と交渉する役割です。これまで強く意識してこなかったスクールプランを考え、研究目標を若手に示し、自らの前に立ち…と活動しているうちに自らの甘さを痛感するようになりました。今回、管理職からマネジメント研修並びに教職大学院を勧められた時に自らを鍛えなおすチャンスだと思い、入学を決めました。

小学校に勤務するようになって思うのは、先生方個々人が持つスキルの多彩さです。小学校勤務歴の長いベテランの先生は、生徒指導に各教科指導、必要ならば進路指導に家庭支援と本当に何でもできます。ですが、そういったベテランのノウハウが先生方の

退職とともに失われようとしています。私は年齢構成的にちょうど中間に位置し、学校の中でも中堅と呼ばれるようになりました。そういった立場で学校改革として何ができるのかを考えた時、一つはベテランのノウハウを若手教員に伝えるための仕組みづくりだと考えました。今年、本校では先生方に「ゆる〜い研究会」を提案しています。これは、授業後の研究会をしない、指導案を作成しない研究会です。たがいに授業を気軽に見せあい、放課後にお茶を片手に職員室のリラックススペースで話し合える仕組みを提案しました。残念ながらコロナ禍でこの仕組みはまだ稼働していませんが、ぜひ進めていきたいと考えています。また、若手からの提案もサポートしています。今回のコロナ騒動では ICT 機器の活用が重要

になりました。本校でも Zoom 等を活用しようと、若手教員を中心に動き出しました。そのためのオンライン飲み会の主催などを行って、教員のコミュニティの活性化を図っています。

今年度のスタートはこれまでにない変則的なものとなりましたが、これまでの学校に足りないものを浮き彫りにしたともいえます。ピンチをチャンスに変え、「学び続け、変化し続ける教師」を体現できるよう頑張っていきます。

最後に、今回の入学を進めてくださった校長先生、市教委の指導主事、支えてくださっている多くの先生方に感謝申し上げます。



金森 久貴 かなもり ひさき

今年度、福井大学大学院連合教職開発研究科教職開発専攻ミドルリーダー養成コース 1 年生となりました、金森久貴と申します。現在の勤務校は金沢大学附属高等学校で、教科は国語科です。今年で教員生活は 14 年目になります。硬式テニス部の顧問を務めています。

大学院で学びたいと考えるに至ったのは、もともといつか大学院で、自らの実践を振り返り、学びなおしたいという気持ちがあったためでした。またその際に在職のまま学べる、福井大学大学院を紹介していただく機会を得たこと、管理職、学校の同僚がここよく送り出してくれたことが、私にとってはありがたいことでした。

自己紹介原稿ということなのですが、5 月の月間カンファレンスで行った三つの種の自己紹介が自らを省察するために有用でしたので、テンプレートを再利用して、文面でもまとめてみたいと思います。

教育活動の中で、これまで大切にしてきたことは、「自分自身が楽しみたい」、「学ぶ意欲を引き出した」という気持ちです。今回教職大学院で学ぶにあたって、「生徒の学びを支援する」ための方策や先行実践を学び、自らの実践にも活かして行きたいと考えています。

現在の勤務校は、生徒の学力、学習意欲ともに高く、やりがい、教えがいのある学校です。その一方で、大学受験という目標に、近視眼的に取り組む生徒も多く、広い社会や学問の世界に対して視野を向けてほしい思いもあります。生徒のチャレンジは当然の

ことながら、教員もチャレンジできる学校であるため、トライ&エラーを繰り返しながら生徒と共に学んでいきたいと考えています。少人数の学校なので、マンパワーに依存している部分もあり、一部の先生に過重な負担がかかってしまう場面も多々あります。マンパワー依存の状態を省察し、システムの改善につなげていくこともこれからの学校の課題です。教職大学院での学びを、勤務校に持ち帰り、職場環境の向上に活かしたいと考えています。一教員にできることはたかが知れていると思いますが、雰囲気作りができれば良いです。先日参加した 6 月のラウンドテーブルが、非常に刺激的で視野が広がり、モチベーションを喚起する取り組みでしたので、そのような学びのコミュニティを職場の中でも共有し、学びの輪を広げていきたいと考えています。

教職大学院でどのような学びを深めていきたいのか、ということについてはまだ手探りの状態です。漠然とした目標として、(1)学校の枠を越えたつながりを作り深める、(2)生徒も教員も学びやすい働きやすい環境づくりを考える、(3)LHR を探究する、ということを考えていますが、具体的な取り組みにすることはできていません。良い先行実践をご存じの方がいらっしゃれば、ご教示いただきたく存じます。また、コンテンツベースになりやすい国語科の授業をコンピテンシーベースにすることも、取り組みたいと思っていることの一つです。

休校期間中は、様々な取組を行いました。zoom 面談、オンラインホームルーム、動画配信、生徒が zoom で行っていたおしゃべり会への参加、など……その中でも印象に残っているのは、「オンラインキャリア

教育」で、卒業生と在校生がオンライン上で対話するという企画です。現在所属している3年生の学年団としての取り組みで、希望する、または興味のある進路に進み、現在学んでいる、または社会人として働いている先輩の話を、少人数で聞くこの取り組みは、生徒にとって非常に良い刺激になり、教員にとっても卒業生の近況や頑張りを聞くことのできる大変貴重な機会になりました。このことが簡便に行われるようになったことは、技術の進歩やICT活用の明るい側面だと思います。6月のラウンドテーブルでも感じましたが、少人数で、しっかりと話し合いをする気持ちを整えて行うオンラインの話し合いは、対面の話し合いにも劣らない経験となるものと感じます。休校期間中に行われた取組ですが、現在もその取組を

継続しています。このように、これまであったものの良さを生かしつつ、新しいものをミックスさせていくことが、これからの学びのニューノーマルを考えていくことにつながるものと思います。

また、やってみたいことはさまざまありますが、それと同時にその取組やチャレンジは持続可能なものでなくてはならないとも思いを強くしています。これも6月のラウンドテーブルで触れた言葉ですが、「バレンタインチョコを買いすぎて破産してはならない」という言葉が心に残っています。愛情がこもった課題やプログラムなどを作ることも大切ですが、その受け取り手の状況や受け取り方にも心を配り、かつ働き手のwell-beingも大切にしながら活動していきたいです。



川崎 耕介 かわさき こうすけ

今年度より、ミドルリーダー養成コースで学ばせていただく川崎耕介と申します。福井大学教育学部附属義務教育学校に勤務しております。どうぞよろしくお願い致します。

私は今でも、小学校2年生のときに学校の窓の外をながめて、田園風景や青々とした山々がのぞむ景色に目を置いていた時のことを思い出します。その時私は、行き交う地域の方々、時々通り過ぎる車に目をやりながら、「あの人たちは、一体どんな生活を送っているんだろう。」「どんな気持ちで仕事をしているんだろう。」と、その人からにじみ出る人生観について知りたいという気持ちが生まれていました。今思い起こしてみれば、人から学びたい、学校という場だけではなく、そのまわりにある人、もの、ことから生きることについて学びたいという欲求が芽生えていたように感じます。

また、小学校の時、近くの山に上学年として縦割り班の子の面倒を見ながら登った日の帰り道や、地域の人と焼き芋をして交流を深めた日の帰り道のことよく思い出します。夕焼け色の風景の中、行事で得た達成感などが入り混じった、なんとも言えない体のほてりと共に下校した感覚を今でも覚えています。幼き心に「青春」を感じた瞬間だったのでしょか。

今世の中では、新型コロナウイルスの感染防止のため、様々な学校の形を模索されています。また、学

びの在り方、行事についても見直されようとしています。新しい教育を創ろうとしています。しかし、これからの学校は、我々が今まで学校で大切にしてきた、先述のようなほてりを伴う「青春」から学んできたものは何かを見つめ直し、何のために先人はそれらの学びを創り上げてきたかを考え、価値付けできるものは残していかないといけないと思います。つまり、これからの教育のために、わるいところ探しだけをするのではなく、よいところ探しもしながら、学校の学びを創り上げていかないと現在考えています。

そのような中、本校では2年前より文部科学省の研究開発校の指定を受け、「社会創生プロジェクト」という新領域の研究を進めています。その領域では、総合的な学習と、国語科の「話す・聞く」「書く」領域を中心に、各教科とも横断的に学びを進め、9ヵ年をかけてよりよく生き、社会の一形成者として他者と協働しながら、社会に提言し、かつ社会に貢献しようとする資質・能力を備えた子供たちを育成しようとしています。私の担任している3年生の子供たちは、「生きる」ことについて、多方面から探究をしようとしています。まさに、私が小学生の時に感じた学びを子供たちは欲しているのです。そのため、今置かれている状況を踏まえ、これからの学校の学びを考えるにあたって、私は、子供と共に「生きる」こと、生きる力とは何かを模索するという「青春」をし、子供と共に、これからの学びを創り上げていきたいと思っています。



Charmoyl Roopen シャモイル・ルーペン

My name is Charmoyl Roopen. I am from Durban, South Africa. Before coming to Japan, I had studied Graphic Design and Visual communication. I had spent 7

years working within the same industry. I specialized in motion graphics and marketing through digital mediums (TV commercials and web). Unfortunately, sitting in front of a computer every day, and the lack of interaction with people made want to challenge something new. I studied further to obtain a Bachelor's degree, and I acquired a Teach English as a Foreign Language (TEFL) certification. In 2015 I was accepted into the Japanese Exchange and Teaching programme (JET). JET is a programme run by selected governments across the world, that employs native English speakers to work as Assistant Language Teachers (ALT). ALT's are also meant to promote cultural exchange and internationalization between our home countries and Japan. Initially, my intent was to work in Japan for just 1 or 2 years, but within my first year as an ALT, I feel like I had adapted very well to teaching, and I fell in love with English language education. I have now been employed by the Echizen City Department of Education for almost 5 years as an ALT.

During these 5 years I have visited 17 different elementary schools in the Echizen City area, taught thousands of students, and worked with teachers of varied English teaching ability. Together with these teachers I have drafted lesson plans and created activities aimed at delivering content that is both engaging and easy to understand. My design background has helped me find interesting and creative ways to deliver English lessons to non-native speakers.

The smiles of students and the trust of teachers have motivated me to pursue teaching as a serious career. I believe that to overcome the limitations of being an ALT, it is necessary to develop the competencies required by trained teachers. Being part of the DPDT is an opportunity to develop that pertinent knowledge.

I highly respect all of the elementary school teachers that I have worked with. During my 5 years here, I have seen the tremendous amount of responsibilities that they hold. English teaching is one of them. It is a responsibility that I wish to share in order to play a more active and relevant role in English education. Being part of the DPDT is an opportunity to expose myself to the fundamental principles that educators follow. It also allows me to understand the education climate within Fukui. My primary interest is understanding elements that encourage student learning. I am curious about the relationship between the quality of lesson materials, lesson delivery, student engagement, and information retention. I want to observe, document and experiment with creative solutions that encourage participation and drive students' passion to learn a new language.

The last few months of online meetings have already helped broaden my perspective of how I think about education. The COVID-19 pandemic has also challenged us to look at unconventional teaching methods and re-examine how we teach in times of uncertainty. I've also had a chance to learn a little about lesson observation. I look forward to our future exchanges. I hope the research that I produce will contribute something of value to this community of teachers, and help us be the best we can be for our students.



Ryan Thornton ライアン・ソートン

Hello! My name is Ryan Thornton, but please just call me by my first name, Ryan. I'm an "ALT", or "assistant language teacher", currently working as a direct hire under the Fukui Board of Education. Let me tell you a little about why I decided to leave my home country of America to teach English in Japan.

It all started after I graduated from high school and my best friend introduced me to the world of anime. It changed my life. I became fascinated by Japanese language and culture, and I started studying Japanese on my own.

Since I was in college, I decided to make Japanese my minor field of study. I took the opportunity to study abroad at Ritsumeikan University in 2009 for a year. That was one of the best years of my life. I enjoyed living in Japan so much that I didn't want to leave, however I needed to return home to finish my college degree. I felt defeated but promised myself that one day I would return.

That day finally came and now I have been teaching English in Fukui for seven years. I love being a teacher. I always want to help my students achieve the best education possible. So, I joined the Middle Leader Development program at Fukui University this spring to become a better teacher.

Right from the very beginning of my tenure as a teacher of English, and as a resident of Fukui, I have always cherished the same things:

Good Rapport- being friendly with or even just smiling at my students is a great way to encourage them to not only want to try speaking English, but also to brighten their days. A little kindness goes a long way. Many students want to test their English communication skills but are too shy to strike up a conversation. Also, I

know how difficult it is to study a foreign language and also that many students aren't too keen on doing it. However, if I accomplish nothing else, at the very least I want to prevent them from disliking English, foreign cultures, or foreign people.

Being Genuine- I neither use nor encourage the use of fake English in or outside of the classroom. I am more than willing to speak more slowly or use simple language with a student. However, I refuse to use English incorrectly just for the sake of understanding. My students are intelligent human beings who are capable of understanding true English if you are patient enough.

This year will mark my fifth year working as an ALT at Usui High School. The students of Usui can best be described as friendly, inquisitive, and more often than not, studious. Most of them see the value in studying hard and can be treated as young adults.

I cooperate with my colleagues every term to create a curriculum that not only challenges the students but also evaluates them fairly. The topics we decide on are meant to expand the students' world views as well as teach them practical English skills.

I mainly lead the second years' T.T. classes. I enjoy engaging them with projects and presentations about the topics discussed in class. Recently I have been experimenting with some project ideas aimed at allowing the students more agency over what they will produce and present. While many of my ideas are still experimental, it is my hope that through the Middle Leader Development program I can refine them and put some of them into practice.

In addition to my duties as an instructor at Usui, I also use my Japanese language abilities to provide an array of translation support for the school. I also sometimes interpret for foreign guests.

During my tenure as a student of DPDT I hope to gain a deeper understanding of how to encourage my students to become more intrinsically motivated. I want my students to be more assertive and independent learners. Teachers can't always be around so students need to learn how to not only think for themselves but also how to learn for themselves as well.

I also want to learn more about how to create a better, more engaging learning atmosphere inside of the classroom. Learning a second language should be fun. As a fellow language learner I want my students to also

experience the joy of achieving competency in a foreign language.

Joining the Middle Leader Development program at Fukui University is without a doubt the next leg in my journey as an educator. I'm looking forward to interacting with both teachers and students from all over Japan. Just like I always tell my own students, "If you happen to see me, please stop by and say 'Hi'." It would be my pleasure to talk with you.



田邊 昌樹 たなべ まさき

今年度より、教職大学院の学校改革マネジメントコースで1年間学ばせていただくことになりました。敦賀市内の栗野中学校、松陵中学校、気比中学校での勤務を経て、現在

4校目となる敦賀市立角鹿中学校にて、3年生の学年主任をしております。角鹿中学校の目の前には、松尾芭蕉も訪れた、日本三大木造大鳥居がある「気比神宮」があり、毎年9月の敦賀まつりでは、その気比神宮を中心として敦賀市内を練り歩く山車巡行に、全校生徒が地域の方と共に参加しています。地域の方々がたいへん温かく、協力的であり、地域と共に子どもを育てているということが実感できる学校です。

また本校は、県内初の施設一体型小中一貫校開校（令和3年度）に向けて、数年前から小中の教員による合同研修会、合同授業研究会を進めてきました。具体的な保健安全、生徒指導、生徒会・児童会、教育課程など、小学校と中学校の担当教員でチームを組んで、各グループで検討を進めてきましたが、開校がいよいよ来年度に迫っており、今年度は大きな変革の1年となります。

現在、本校には、「学習意欲と学力の向上」という課題があります。それは「社会性の育成」「自己有用感の向上」を図っていくことによって高まっていくと考え、そのために今まで、日頃の生徒理解・生徒指導を中心とした子どもたちへの関わりとともに、外部や地域との連携、学校行事、ふるさと学習、キャリア教育を効果的に生かし、学校全体で子どもたちの

社会性を育成し、自己有用感を高め、心づくり、集団づくりを行うことができる組織マネジメントを研究してきました。昨年度、学校行事や2年生の立志式などを通して、自己有用感が高まり、生徒の雰囲気も変わってきたように思います。さらには、廊下に学習スペースを作るなど環境を整えることで、学習意欲や習慣も高まってきていると感じています。また、県教育総合研究所にご指導いただきながら、ピア・サポート学習、ポジティブ教育の3年間の取組みが始まっており、今年度は2年目。今年度、私は研究主任という立場として、ポジティブ教育を研究の柱として全校でどう取り組み、どのような成果を挙げることができるかを研究し、深めていきたいと考えています。

昨年度、事前履修として1年間、夏・冬の集中講座、ラウンドテーブルなどに参加させていただき、文献を読むことにより新たな学びをし、自分自身の今までの実践を振り返り、そしてそれを異校種、異年代の先生方と共有できたことはとても貴重な経験であり、多くの視点と刺激をいただきました。自分の変化を感じた1年間でした。教職大学院で学ぶ良さは、教師として「熱い気持ち」や「喜び」、「悩み」や「苦しみ」を共有することにより、新たな発見ができ、エネルギーをもらえることだと思います。悩んでいるのは一人じゃない、といつも感じさせられ、安心して様々なことに取り組めたように思います。今年度も、4月、5月の合同カンファレンスにてさらに学び、多くの先生方と思いを共有することができました。この先、また新たな文献や先生方との出会い、そして自分自身がどのように変わっていけるのかが楽しみで

す。教職大学院での学びが、子どもたちのために生かされ、そして今後の教育を支える若い先生方の力に

なれたらと思います。これから1年間、どうぞよろしく願いいたします。



渡辺 博英 わたなべ ひろひで

こんにちは。今年度、学校改革マネジメントコースに1年履修という形でお世話になります渡辺博英と申します。現在、あわら市芦原中学校に勤務し、研究主任と学年主任をさせていただいています。昨年、県のマネジメント研修を受け、その折に教職大学院の1年履修のお話をいただき、不安はありましたが、一念発起して今に至っています。今回の自己紹介の機会を借りて、自分のこれまでの教員生活について振り返ってみたいと思います。

正直なところ、自分は教員には向いていないと思っています。「子どもが好き」だからという理由で教員を目指したわけでもありません。高校時代、たまたま好きになった数学を仕事にしたい、福井でそれができるのは学校の先生だろう、今思えばそんな単純な理由でした。ただ、向いていないと分かっているのなら自分の足りない部分を大学4年間で補完できるのではないかと、そんな思いもあったと記憶しています。

平成5年に新採用として三国中学校に着任しました。ところが、いざ学校が始まってみると、生徒指導、部活指導など大好きな数学とは無関係の仕事がメインで当初は不平不満ばかり言っていたように思います。それでも、時間割作成や清掃指導など、900人規模の大規模校を動かす仕事を任せられ、また、3年生担任も3回経験させて頂き、自分の教員としての礎となっています。

平成14年に9年間務めた三国中学校から、母校の金津中学校に異動しました。数学の教員として、教材研究や授業研究などもそれなりにやってはいましたが、ここでもメインの仕事は「部活動」とばかりに、部活動に打ち込みました。その間、中体連の専門部の仕事などにも関わりました。学生時代、運動部とは無縁だった自分としては、部活動は知らないことを知るよい機会だったと思います。ただ、全く休みはありませんでしたが。

平成17年から丸岡中学校にお世話になることになりました。当時1000人規模の学校で、生徒指導でもなかなか困難な状況にあると聞いていたため、新採用の時以上に不安な気持ちでした。ところが、学校に挨拶に伺ったその日、竹田分校勤務を命ぜられ、

県下最大規模の学校でなく、全校生徒13人の超小規模校に勤務することになり、本校と分校のあまりの違いにかなり驚きました。竹田分校では、通常の業務に加え、HP作成やCPを利用した授業など、新しいスキルを得る時間がありました。また、併設されている竹田小学校の先生方や地域の方々と協働する場面が多くあり、小規模校でありながら、学校が沢山の人の支えられて成り立っているということを実感する機会となりました。3年間の分校勤務の後、再び本校＝大規模校での勤務となりましたが、この時、丸岡南中学校の開校とともに生徒数も700人程度に減り、学校もかなり落ち着いた状況でした。この間、進学主任も任せて頂き、学年全体のマネジメントについて多少なりとも触れる経験はとても貴重だったと思います。また、部活動の顧問としても、団体、個人を含めて数回北信越大会に出させて戴き、当時の生徒とその保護者の方々には心から感謝しています。

平成24年から赴任した春江中学校の7年間は、少し生意気になっていた自分にいろいろと考えるきっかけを与えてくれる時間であったと思います。赴任当時は、明らかに生徒指導困難校といえる状況だったと思います。連日連夜の生徒指導に保護者対応、当時の先生方の頑張りは本当にすごい一言でした。しかし、毎日毎日生徒や保護者と話をし、その思いを傾聴したおかげで、今まで自分が気付かなかった視点に気付くことができました。「生徒主体で考える」という教員として当たり前のことを、40歳を過ぎてようやく心の底から実感することができたことは、非常に恥ずかしい話です。担任を離れ、学年主任を任されるようになってから、芦原中学校に異動した現在でも「生徒の話を傾聴し、保護者の思いを受け止める」ことを最優先に考え、学年経営をしているつもりです。

今年で教員生活28年目を迎えています。向いていない思いながらも、周囲の先生方や保護者の方、何より子どもたちに支えられてなんとか頑張ることができています。本当に有難いことです。これまで、「何ができるか」とか「何がしたいか」「何ができたか」など考える余裕もなく、とにかく突っ走ってきたように思います。しかし、過去に自分が携わった仕事が全体から見てどうなのか、目的が達成できる

のか、組織的に動くとはどういうことなのか、マネジメント研修の中で本当にたくさんのことを真剣に考えました。教職大学院でしっかりした教育理論を学ぶとともに、素晴らしい実践をされている方々と語

り合い、これまでの実践について省察し、自分の実践のみならず、学校のあるべき姿などについても考えていきたいと思っています。



寺澤 哲也 てらざわ てつや

私は、昨年度、福井県教育総合研究所の「マネジメント研修」を受講しました。初めは、年齢的にとか流れ

でとかそういう曖昧な理由で参加していましたが、教職大学院の木村先生や淵本先生のご講義を聴いたり、他の学校の実践や取組について話し合ったりすることで、学校組織マネジメントやカリキュラムマネジメントの必要性について意識するようになりました。さらに、事前履修として教職大学院の夏期・冬期の集中講座やラウンドテーブルにも参加する機会を得ることもでき、実に充実した1年間を過ごすことができました。今年度より、学校改革マネジメントコースで1年間という短い期間ではありますが、同じ教職大学院の先生方といろいろなことを語り合い、これからの教育実践につなげていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

新採用から24年が経ち、それぞれの学校でたくさんの先生方や生徒、保護者と出会い、多くの失敗や数少ない成功体験をしながら授業の在り方等について学んできました。現在は、福井県あわら市芦原中学校で、保健体育の教員として勤めています。

芦原中学校は、校区の小学校がいくつか統合され、小学校から中学校に上がる際も、地域・同学年・異学年・性別を問わず仲がよいのが特徴です。また、素直な子が多く、課題やグループでの学習に熱心に取り組む生徒がたくさんいます。また、教職員においては、学年間で縦と横のつながりが強く、共通理解・情報交換がスムーズに行えます。

一方で、生徒数の減少により友達が固定化され、多様なものの見方や考え方の交流や、大勢の前での表現活動に消極的な部分があります。また、話し合い活動や協働的な活動で、学習内容の深まりや広がりが必要難しいといった面もあります。こういう分析からより良い教育実践にむけてプランを立て、吟味し実践して省察する流れはとても大切なことだと、昨年度の研修や集中講座で学びました。このような「学ぶ」機会がなければ、突発的で場当たりの実践をやっていたのだろうなと思うと、これから行う教職大学院での学びが本当に大事だと感じました。

昨年度は、第2学年の学年主任として、上記の分析から具体的な実践プランを立てようと部会に投げかけ、学習と道徳・ふるさと学習を重点項目として実践を試みました。学習では、対話的で深い学び合いを目指して、学年内で授業を見合い研究会を設けて、次の授業に生かす取組を行いました。それぞれ授業を受け持っていることもあってなかなか全員で見るということはできませんでしたが、話し合いで話題を共有することで様々な意見が出て、有意義な研究会ができました。今年度はコロナウイルス感染症の影響でスタートこそ遅れましたが、この実践を続けていきたいと考えています。また、UPテストという基礎力確認問題を国語、数学、英語の教科において定期的に行い、学力の定着と深い学び合いが図れるようにしていきたいと考えています。

道徳については、輪番制を定期的に取り入れ、教員としてはその題材に対するより深い学びを追求し、生徒としては多様な考えに触れて視野をより広められるようにしていきたいと思っています。また、全体での研究授業は年に2回行われますが、今年は2回とも道徳に関する授業実践を行い、今後の道徳の授業がより充実するように研究していく予定です。

ふるさと学習については、昨年度、総合的な学習の時間についてカリキュラムを見直し、3年間を通して取り組めるように設定しました。第2学年での活動では、ふるさと「あわら」について調べ、校外体験学習でPR活動を行いました。同じあわら市の金津中学校の生徒と、テレビ会議でお互いのPRの仕方を紹介し、当日は同じ場所で合同でPR活動を行いました。また、あわら市は国際交流派遣事業として、アメリカ・オレゴン州のユージーン市や中国の紹興市と毎年交流しています。今回、校外体験学習で行った活動を活かし、アメリカでもあわら市をPRしてきました。中国に関しては、コロナウイルス感染症の影響で派遣自体がなくなり、残念ながらPR活動を行うことはできませんでした。今年度もなくなり、来年度はぜひ実施できるよう期待しています。

これまでの実践や、最近行っている実践について、若いころに学んだ知識やそこで得た「種」が実に多く役立っていることに気が付きました。教職大学院で

多くの方と語り合い、これまでのことを一つひとつ紐解き振り返りながら、より良い実践につなげてい

きたいと考えています。今年 1 年間どうぞよろしくお願い致します。



中村 達治 なかむら たつじ

今年度 4 月、学校改革マネジメントコースの 1 年履修で入学しました、中村 達治です。昨年度は事前履修を受講していましたが、実際は大学院生ではなかったのが、今年度ようやく“学生”となることができ、たいへん嬉しく思います。どうぞよろしくお願い致します。

私は、30 歳にして正規の教員になることができました。というのも、紆余曲折の人生を歩んできたからです。いわゆる就職氷河期の真っ最中の学生時代でしたが、大して何も考えずに就職活動をしていたため、苦労した後、富山県に就職しました。しかし、思うところがあって会社をやめ、長い長い“自分探し”の期間を経て、教職の人生を歩むことを決心したのです。佛教大学の通信教育で教員免許をとるところからのスタートだったので、私にとってかなりの冒険でしたが、追い詰められたことが功を奏したのか、夢を叶え、教員になることができました。採用になった当初は、周りの先生よりも遅くに教員になったというコンプレックスがありましたが、逆にそれを武器にしていきたいと思うようになりました。

教員になって 15 年余りが経ちましたが、自分の選択は正しかった、難しい道を選んでよかった、と思います。通信教育のスクーリングでは、8 月の毎週日曜日、朝 5 時 1 分富山発のサンダー・バードに乗り、京都まで通ったことがよい思い出です。そのスクーリングでは、同じ目的をもって様々な県から集まった方々と、体育や図工などの体験活動をともに行いました。初めて出会った人たちがばかりでしたが、コミュニケーションをとりながら協力して体験活動ができました。実はそこで得た経験が、今の私の教育観をつくっています。つまり、「体験が人の心を豊かにする」という考えです。初めて出会った人とでも、体験を通して仲良くなることでぐっと心の距離が縮まった経験は、私にとって大きな財産です。私は今、上中学校の 1 年生 63 名を担当する学年主任をしています。これで学年主任としては 5 年目になりますが、「総合的な学習の時間」や学年行事には、考え得限りの体験的活動を取り入れてきました。中学 1 年生といえば、「中 1 ギャップ」と言われるように、乗り越えるべきことがたくさんあります。その中で支え

となるのが、同じ学級、同じ学年の仲間です。初めて出会った仲間とも充実した体験活動をともに行うことで、私自身が体験した時と同じように、心の距離を縮め、絆を深められるように支えていきたいと思っています。

さて、教職大学院では、昨年度の事前履修の時から数多くの先生方の実践を聴いたり、自分の実践を聴いてもらったりして、学びを深めてきました。ここに来る前は、それこそ「大学院？大変そう…」という考えしかありませんでした。でも、学年主任をするようになったころから、マネジメントに関心を持ち始め、校長先生からタイミングよく、県のマネジメント研修のお誘いを受けました。不安もなくはなかったですが、校長先生の後押しで受講を決めました。それが縁で、今教職大学院に通うことができています。本年度は事前履修の時とは違い、これまでにわたる自分の実践を、マネジメントの視点を取り入れて振り返るようにしています。また、これから大学院卒業までの実践についても、学校運営のなかでどのように「ヒトやモノ、カネ、情報」を動かしていくか、というマネジメントの視点を大切にして学年を運営していきたいと考えています。様々なリソースを活用できるよう、成功や失敗を積み重ねながら、自分の糧にしていきたいと思っています。

コロナ禍の中で、大学院での学びが ZOOM を通したオンライン学習となり、対面のときとは違った良さもありますが、反対に課題も浮き彫りとなっています。ZOOM をしていると、「未来の教室はこんな感じになるのかなあ」などと想像を膨らませながら同士と語り合っているのは、本当に楽しい時間でした。私は、私をここに導いて下さった多くの方々に恩返しをする意味でも、この教職大学院での学びを最大限に活かしたいと思います。1 年履修のため、大学院での学びに残された時間はあと 9 か月です。コロナ禍のなかで先行き不透明ですが、6 月の学校再開後、授業や授業準備、その他の学校業務に忙殺される毎日です。そんな中でも私は数年後の未来を見据え、「地域に開かれた学校をつくりたい」「“自分らしさ”を存分に発揮する児童生徒たちを育てたい」という希望を忘れず、がんばっていききたいと思っています。



玉谷 太 たまや ふとし

今年度、福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコースに1年履修として入学しました玉谷太と申します。現在、坂井市立長畝小学校に勤務しています。どうぞよろしくお願いいたします。

長畝小学校では教務主任を務めており、勤務は2年目になります。1年目は初めての学校、初めての教務主任ということで、大変忙しく不慣れな毎日を過ごしました。2年目になれば学校にも仕事にも慣れ、時間的な余裕が生まれるのではないかと期待していました。ところが、新型コロナウイルス感染症への対応に追われ、行事の調整などで1年目と変わらず忙しい毎日を送っています。さらに、新型コロナウイルス感染症への対応は、「何が正しいのか」がよくわからないので、行事や校時表などはいくつも案を立てては修正を繰り返すことが多く、仕事に追われる感じは1年目よりも強くなっています。

そんな中で教職大学院での学びが始まりました。Zoomを使つての遠隔授業は初めての経験です。直接顔を合わせての話し合いとは勝手が違い、「新鮮」な感覚を味わえるものの、発表者の話をしっかり聞いて、自分の感想や考えを話す難しさは変わりません。そのうち難しさが解消できればいいのですが、カンファレンスなどで同じグループになった方に迷惑をかけないようにがんばりたいと思います。

自信のなさという点では、自分が経験から得られている知見の底が浅いのではということも心配です。大きな研究実践に取り組んだ実績もなく、担任としてしっかりと学級経営をしてきたわけでもありません。「省察」という言葉も、大学院で学ぶまで知りませんでした。振り返りをすると何が見えるのか。

見えたものを学校改革の取組にいかすことができるのか。考えて答えを見つけようとするのが、教職大学院での学びであるなら何とかなるのかなと思います。

私の教員生活の原点は、初任の中学校で野球部顧問を務めたことです。野球熱が高い地域の中学校で、強いチームづくりを求められ、大変なことがたくさんありました。でも、若さゆえの前に進もうとする力や、周囲の先生方や保護者の皆さんの支えもあって、充実した7年間をすごせたと思います。当初は前任の先生がつくったチームだから勝つことができました。しかし、私がつくった3・4年目のチームでは勝つことができませんでした。どうしたらいいのか悩む中で、チームの目標を生徒に考えさせることや、ミスをしてそのミスを繰り返させないことなど指導方法を変えていきました。その結果、後半の3年間では勝利を重ねることができました。練習に真面目に取り組んでいなかったら怒ってばかりいた指導から、「真面目に取り組まないなら目標を見直したら」とアドバイスのような声かけをする指導に変えました。エラーをしたら「なにしてるんじゃー」と怒っていたのが、「どんまい。どんまい。気にするなー」と声をかけ、エラーを挽回することに集中させるようにしました。指導者が変われば、子供も変わることを経験できました。

学校改革もきっと同じだろうと思います。先生が変われば児童が変わる。先生が変わっていくために必要なことの一片でも学べるよう、教職大学院での学びの場を大切に、自己の研鑽に努めていきたいです。



向井 敏幸 むかい としゆき

本年度から学校改革マネジメントコースで1年間お世話になります。よろしくお願いいたします。

私が所属する越廼中学校では、総合的な学習の時間において地域の活性化を学習テーマに様々な取り組みを行っています。H28年度から4年間継続して取り組んでおり、現在、5年目を迎えています。地域活性化につながるこうした取り組みは「越廼PR」とよばれ、総合的な時間を中心に教科等横断的につながるなど、カリ

キュラム・マネジメントの視点からも成果を上げています。私は「越廼PR」の立ち上げから昨年度まで主担当として携わっており、本年度は副担当として、新しく主担当となった若手教員をサポートしながら引き継ぎを行っています。本活動では、中学生が考案した地域活性化につながるアイデアを地域の方と企画・実行し、中学生が発行する「越廼 町おこし新聞」に活動の過程や成果をまとめ、毎月地区内の各家庭に配布し、活動の様子を発信しています。こうした活動は国からも認められ、昨年11月には「令和元年度

未来をつくる若者 オブ・ザ・イヤー 内閣府特命担当大臣表彰」の受賞にもつながりました。しかし、本校では教員異動や若手教員の増加により、「越廼 PR」の活動の継続が難しくなっています。地域や学校の核となる活動として発展してきた「越廼 PR」を持続可能なものとするためにも、私自身がこれまでの積み重ねた「経験」の継承は喫緊の課題となっています。

こうした背景から、「越廼 PR」の引き継ぎを昨年度から行っていますが、「越廼 PR」の「経験」は、私の主観的な記憶として残されているため、「経験」を他者と共有することは容易ではありませんでした。私の中にある「越廼 PR」の「経験」のほとんどが「自分の働きかけによりこうなった」「今までこうしてきたことでこのようになった」という自分主体の視点からの記憶として残されており、私にとって必要な部分と印象的な部分のみが記憶として断片的に私の中で保存されていました。実際、自分が記憶している「経験」をそのまま伝えようとしたのですが、引き継ぐ相手に活動の核となる部分や活動を行う意味をうまく伝えることはできませんでした。私が自分主体に語った「経験」は、聴き手には自分事としてとらえられなかったでしょう。自分の記憶の中にある「経験」を、自分が感じたまま伝えても、その「経験」が他者の中に残らないことに私は気づきました。おそらく、主観的に語られる「経験」は、語り手の記憶の中で一つの物語として自己完結しているため、聴き手がその物語に入って追体験する機会が与えられないのだと思います。そして、そうした話は語り手の肯定感を満たすだけなりがちです。そのため、多くの経験談は、「あの人がだったから・・・」「あの頃だから・・・」というように語り手固有のケースとして聴き手に理解されてしまうのだと思います。人々が積み重ねた「経験」は、その「経験」にどれほどの価値があっても、どのように伝えるのかを考えれば、「経験」の継承は困難なものになってしまいます。

「主観的な視点で積み重ねられた『経験』を、他者に伝えることができる『経験』にするにはどうすればよいか？」

この問いに対して一つの答えを示してくれたのが、昨年度受講した福井大学連合教職大学院の夏期集中講座・冬期集中講座でした。そこでは、自分の「経験」を振り返るために特定の視点が与えられ、その視点をもとに「経験」を捉え直す作業を行いました。初めての作業でしたが、新たな視点から自分の「経験」を振り返ることで、私の主観的な「経験」は客観的な新しい「経験」として生まれ変わりました。さらに、このような「経験」をもとに他校種、他都道府県の先生方や専門性を有する教授と語り合うことで、それぞれの持つ視点から「経験」を掘り下げ、そこから他者に伝えるべきポイントが何かを見つけ出すことができました。私はこの作業を「宝探し」のようだと感じました。この「『経験』の中にある宝探し」を通じて、聴き手は語り手の「経験」を自分ごととして追体験し、語り手もまた聴き手の問いについて考える中で、国や地域、年代や立場を超えた様々な他者に伝わる「経験」として磨かれていくのだと思います。

「若い頃の自分の写真を撮っておくといいよ。過去の自分が、今、何をすべきかを教えてくれるから。」

この言葉は、10 数年前、ある先生からいただいた言葉です。学校は学びの場であり、教育におけるマネジメントの基盤には、「組織による学び」が不可欠だと思います。私は、福井大学連合教職大学院での学びを通じて、自分や他者の中に眠る「『経験』の中にある宝」を見つけ、それをつなぎ、魅力ある福井の教育を目指していきたいと思っています。1 年間という短い間ですが、よろしくお願いします。



柳本 寿美子 やなぎもと すみこ

「一期一会」。素敵な言葉ですが、これまで作文の中でしか書いたことのない言葉でした。仕事や家庭に精一杯なときに、この言葉にぴったりな出会いが

ありました。

私は今年度、連合教職大学院学校改革マネジメントコースに入学しました柳本寿美子です。福井県立病院に隣接する福井東特別支援学校に勤務しています。本校は病弱・肢体不自由を対象とした学校で、私は重度の障がいのある子どもたちを担当しています。子どもたちのちょっとした手の動きや発声、視線、まばたきなどの発信を通して子どもたちと関わっています。本校には医療的なケアを受けている子どもたちもいて、看護師さんもいます。子どもたちにとって看護師さんはなくてはならない存在であり、私たち教師も看護師さんの支援のもと、子どもたちと一日一日を大切に過ごしています。

私は、中学生時代に特別支援学級(当時の特殊学級)の先生の優しさに間近で触れ、自分もこんな先生になりたいと思い教師になりました。特別支援学校での25年間で、いろいろな障がいのあるお子さんと関わってきました。一人一人、障がいが違うように支援方法ももちろん違います。校内全クラスの一日の予定を毎朝確認するのが日課の子どももいました。気圧の変化で体調や機嫌の悪くなるお子さんもたくさん見てきました。

特別支援学校の生徒数は小中高等学校の生徒数よりかなり少なく、私が教員になってから出会った子どもたちの数は他の校種の先生方よりかなり少ないです。同時に子どもたちも就学中に出会える友達や教員の数は限られてきます。だからこそ学校では子どもたちに有意義で、より多くの人に出会ってほしいと考えています。

さて、連合教職大学院入学のきっかけとなったのは、平成30年度に福井県教育総合研究所主催の「マネジメント研修」を受講させていただいたことです。管理職の先生から声を掛けていただき、異校種の先生方とも話をしてみたいと思い受講を決意しました。ここで私は30年ぶりに中学生時代の恩師、淵本先生と再会したのです。特別支援学校の先生になりたいと夢見ていた私を励ましてくださった恩師との再

会に私は、「本当にこんなことってあるのだ」という奇跡を感じました。何かとてつもなく自分の中で揺り動かされるものを感じたのを今でも強く覚えています。たとえ同じ職業に就いたとしても、出会えるとは限りません。淵本先生との再会は私に何か使命を与えていただいたのだと思いました。

また、マネジメント研修で出会った異校種の先生方に特別支援学校を知っていただき、励ましてもらったことも後押しとなりました。私は障がいのため学校という狭い世界にとどまりがちな子どもたちのことを地域の方に知ってもらいたい、これからの時代を生き抜く子どもたちに、障がいのある人たちと一緒に地域で豊かに暮らせることが当たり前な世の中を創ってほしいという思いを抱いていました。そうした思いを研修に参加していた先生方と共有できたことはとても大きな意味がありました。

「ひとはひとの言葉によって勇気づけられたり、意味を感じたりして自分も前に進もうとする」。これは私が常々感じていることです。私にとっての「一期一会」は、進むべき道を切り開いてくださった恩師や、これまでに出会った先生方です。また人との出会いだけでなく、言葉との出会いもあると思います。新採用時代に担当した自閉症の女の子のお母さんに、当時私はちょっとした詩を送りました。日々我が子とどう向き合っていけばいいのか悩んでいたお母さんに、ちょっとだけ元気をあげることができました。他にも、担当した子どもたちのお母さんの言葉から学ぶことも多々ありました。人と人はこうして支え合い、つながり合いながら成長していることを感じます。

私は今、とても希望で胸が膨らんでいます。日本の人口約1億3000万人の中の何人の先生方と出会い、素敵な実践を聞き、共感し合い、学び合えることがとても楽しみです。そして、それをまた私の身近な子どもたちや保護者、同僚の先生方に伝えていきたいと思っています。

コロナ禍の中、予測困難な時代を生き抜く私たちにとって現在のようなオンラインを使った取組は、これまで以上に人と人がつながる意味を感じ、つながり方を考えます。つながるだけでなく、つながって何を話すか、何を目指すかを今一度確認しながら、意味あるものにしていきたいです。どうぞよろしくお願ひいたします。



仲保 彰人 なかぼ あきひと

—教員生活 10 年目は波乱の予感です—

今年度から教職大学院でお世話になることになりました、武生東高等学校の仲保彰人と申します。

教員として採用された当初はとにかくわかりやすい授業をとの一心で丁寧な授業を心がけていましたが、グループ活動重視の流れを受けて公開授業に挑戦しては失敗してお叱りを受けるなど、自分のスタイルが築けないまま迷走しながら経験年数を積み上げてきました。最近になってようやくプリント学習をメインとして、対話的活動を取り入れる授業形式ができるようになったのですが、自分の授業が頭打ちになっている気がしていました。そこで、教員生活 10 年目という節目の年に、もう 1 度教育について学び直すことで、さらなる授業改善・授業力向上ができないかと思い、入学を希望するに至りました。

私の勤務する武生東高等学校は豊かな自然に囲まれた全校生徒 523 名の学校です。普通科の他に国際科が併設されています。近年生徒間の学力差が大きくなっていることや、新大学入試に必要な不可欠とされる読解力が十分に身につけていないことなど、指導上の様々な問題を抱えています。本校では今年度から、『授業改善自主研修会』という組織を作り、

教科横断型授業や授業見学など互いに協力して、個々人が理想とする授業ができるように研鑽を積もうとしています。昨今のコロナ禍で登校禁止が続いたり、教育活動が制限されたりするなど、出鼻をくじかれる形にはなりましたが、ついに先日活動を始めることとなりました。昨年立ち上げに大きくかかわっていただいた先生が異動になってしまったことで、教職大学院に通う私が、謀らずもイニシアチブをとることになり、自分にできるのであろうかと大変不安な日々を過ごしております。先生方は日々忙しく過ごしておられるので、できることから少しずつやっていくしかないのかとも考えています。

遠隔ではありますが、4 月から何回か大学の先生方や院生の方々といろいろな話をさせていただいて、勉強になることが多く、特にインターンシップの教育現場で悪戦苦闘されている院生の方と話をさせていただけるのは、初心を思い出すと同時に、自分の教員としての変化を振り返る機会となり、大変良い刺激になっています。これから教職大学院の 2 年間で多くのことを学び、経験することで、教員として一段階成長できるように、また多くのことを教育現場に還元できるように頑張りたいと思います。ご指導及びご鞭撻をよろしくお願いいたします。

ミドルリーダー／マネジメントコースだより

3ヶ月の遠隔授業からニューノーマルへ

ミドルリーダー養成コース 2 年/カリタス女子中学高等学校 小俣 悌彦

福井大学連合教職大学院に入り 2 年目を迎えている。しかし、「2 年目」という実感はかなり薄い。前回、福井に行ったのが 2 月中旬のラウンドテーブル。まさかその後に休校措置が始まり、それが数ヶ月続くことになるとは夢にも思わなかった。大学院でも学位授与式や開講式が中止されたが、勤務校では 3 月 2 日から休校措置が始まり、期末試験や終業式などがなくなってしまった。私は、今年度中学 1 年担当になり、新年度の開始を心待ちにしていた。4 月 3

日の時点では、入学式だけは何とか実施しようと準備を進めていたが、その直後、5 月 7 日まで休校措置の延期が決まった。中学 1 年担当としては、5 月 7 日の入学式実施を目指しつつ、学校全体としては 4 月 13 日 Zoom を使った遠隔授業の試行を始めた。4 月 21 日からは、ほぼ平常の時間割（1 日 7 コマ）で実施することになった。試行期間の授業の後に、全校の生徒アンケートを実施し、生徒や保護者の意見を聞く機会を設けた。その結果、遠隔授業そのものには好意的

で、生活や学習のリズムが作れて有難いという意見が大半であった。一方では、目の疲れなど、画面を見続けることによる体の不調を訴える声もあった。私自身も、遠隔授業そのものには賛成だったが、通常の時間割で実施することには賛同できなかった。生徒のことはもちろん心配であったが、教員の体にも大変負担になってしまうことを危惧したのである。しかし、本校では中学高校 6 学年 1101 人の生徒に対して、教員は専任 60 名、非常勤講師 56 名が授業を担当していて、語学や数学の授業に加え、理科の実験などはクラスを半分にして行うハーフクラスでの授業を実施している。時間割を組み直すことは容易ではなく、授業時間は通常の 45 分を 40 分に短縮すること、そして授業内容を工夫して、画面から目を離す時間も確保できるようにすることで、何とか「平常通り」の形で実施していくことになった。4 月が終わる頃、学校再開の延期が決定した。入学式も 6 月以降となったため、しばらくは遠隔授業に専念しつつ、状況を見守っていくしかなかった。6 月になると、分散登校で再開する学校がほとんどであったが、本校の場合は多くの遠距離通学者がいる私学であること、そして、学校の大きな特徴である「教科センター型」で校舎内の移動が多いことなどがあり、感染の不安がない遠隔授業を続けることが最善という判断であった。そして、この原稿を書いているのは 6 月下旬であるが、ようやく学校の再開が決定した。7 月 2 日から分散登校そして、7 月 4 日には中学の入学式が行われる予定である。

教職大学院 2 年目の実感が持てないというのは正直なところであるが、この 3 ヶ月は自宅から遠隔授業をしながら、月に数日出勤するという生活を送ってきたため、これまでになく振り返る時間を確保することができた。5 月 2 日のカンファレンス準備会に参加した時は、「昨年度まで頼りにしていた先輩方がもういない、今度は自分がリードする立場だ」と気が

引き締まるのと、不安感と入り混じったものを感じていたが、徐々に 1 年前とは違う自分を感じることもできた。グループでのセッションの度に、何か形がある立派な報告をしなければと気負うこともよくあった昨年度であるが、今年度は「ありのまま」の感覚を大事にして報告できるようになっている。遠い神奈川県にある本校から福井大学教職大学院に派遣されるのは私が 5 人目である。4 人の先輩方は、ミドルリーダーとして活躍されていて今回のコロナ対応でも中心となって動く存在であった。私自身はどうか。学校の何かの戦力になっているのだろうか。自分ができることは一体何なのだろう。大学院での学びは充実しており、5 月の合同カンファレンスや 6 月のラウンドテーブルは今後の学校のニューノーマルに向けてのヒントに溢れるものだった。1 年前の 4 月は「生徒の主体性を育てるには」「教員の協働をいかに進めていくか」というテーマでスタートした。現在は、この先行き不透明な社会で生きていく力を育てるために、「学校はどうあるべきか」「組織はどうすれば活性化するか」「子供にどんな学びが必要か」といったことを考えている。また、このコロナの対応とは関係なく、中学生全員に一人一台の iPad を持たせる計画が前年度からあり、この 5 月に実現することができた。Zoom による遠隔授業もあと 1 週間で一旦終了となるが、場所や時間を問わずに繋がれるツールは今後も活かしていくことができるのではないかな。これから 1 週間後にいよいよ新入生とリアルに対面する。これからスタートであるが、新しい学びへの挑戦が始まる。この 4 月、本校から 6 人目の教員が福井の仲間に加わり、協働で何かできないか模索中である。この 10 月には創立 60 周年を迎える本校である。これからの新しい未来に繋がるようなチャレンジをしていきたい。

語りあい、聴きあい、記録することからの学び

ミドルリーダー養成コース2年／兵庫県立御影高等学校 土居 亜貴子

2019 年 4 月 6 日、足羽川の桜を満喫してから開校式へと向かった。福井の連合教職大学院で学びたいと考えたのは、教員生活が折り返し地点を迎えたからだ。これまでがむしろに突っ走ってきたことに後悔はない。でも、やっと一息つけるようになってみると、これから先どのように進んでいきたいのかわからなくなっていた。少し立ち止まって自分の進

むべき道をじっくりと考えてみたいけれど、生徒たちがいる現場からは離れたくない。だから、学校拠点方式の連合教職大学院で学ぶことを選んだ。

入学当初、私は今までの苦い経験から、「協働するコミュニティ」なんて理想にすぎないと思っていた。そのため、新たに実施することになった総合的な探究の時間を担当するにあたり、授業を一緒に担当す

るペアの先生に負担をかけないことを心掛けていた。先生方は多忙で、探究活動なんて必要ないと感じている先生が多いだろうから、授業をスムーズにするためには自分になるべく多くを引き受けなければいけないと考えていたのだ。ところが1学期が終わるころになって、いつも積極的に生徒たちに声掛けをし、授業の準備にも協力してくださっている先生から、「ごめんなさいね。ぜんぜん協力できなくて任せてばかりになっちゃって。申し訳ないわ。」と言われたことで自分の傲慢な思い込みに気がついた。『自分で全部やるほうが他の先生にとっても都合が良いはずだ』という考えは、周囲の先生方を信頼していないということなのだ。「協働するコミュニティ」を阻害していたのは、私自身の思い込みだった。

夏の集中講座 Cycle 1・2 で「学校を変えるカーイーストハーレムの小さな挑戦」や「コミュニティ・オブ・プラクティス」を読み、組織がうまく機能している状況とはどのようなものなのかということを少しイメージできるようになった。Cycle 3 でこれまでの自分を振り返ってみると、ささいな言葉や出来事に縛られて委縮してしまっていたことに気がつき、「生徒たちのキラキラした姿を見たい。そして、そばにいて一緒に成長したい。」という望みを思い出すことができた。大切にしたいことが明確になったことで、他の人と意見が食い違った場合でも譲れるところと譲りたくないことを意識しながら交渉し、合意形成がしやすくなった。総合的な探究の時間の授業についても、ペアの先生から授業内容や来年度に向けての提案をしてもらえたり、グループワークや発表の様子を見に来てくれる先生が増えたりという嬉しい変化がみられるようになった。

慌ただしい日常から無理やりにでも距離を取り、実践を振り返って語り記録することが省察につながる。省察で自分が変わると、周囲との関係性も変化していく。連合教職大学院での学びの成果を実感しはじめた矢先に、新型コロナウイルスの感染が急速に

拡大した。感染防止のための臨時休業期間中は、教職員間の価値観の違いが浮き彫りになり、もどかしく悔しい思いをすることが多かった。先が見通せず不安や不満が高まるばかりの状況だったのだが、大学院の先生の助言により、学校がどのように対応し、それについて自分が何を感じ考えているのかを記録するよう努めた。記録することによって、苦しい状況であってもできることに目を向けて感謝の気持ちを持てば良いのだと考えられるようになった。また、オンラインであってもカンファレンスに参加できたことで、自分が大切にしたいことを再認識したり、共感してくれる仲間が全国にいることを実感できたりして勇気づけられた。

学校再開から3週間がたった2020年6月20・21日、実践研究福井ラウンドテーブル Summer Session にオンラインで参加した。その少し前、生徒たちに会えて嬉しいのに心身ともに疲れてしまってラウンドテーブルの発表準備がままならない状況に陥っていた。しかし、「なぜ疲れているのか」を省察すれば良いのだという助言をいただいたことで一気に気持ちが切り替わり、語りたいことがあふれ出るようになった。休業期間中の記録を読み返すと、部活動の集大成の場を失われた高校3年生のことを思っ心て心痛めていることが多かった。学習の遅れはさほど気にならず、部活動や学校行事が失われていくことばかりが辛く感じられるのはなぜだろうか。実は、目の前の生徒のことを思っ悲しくなっているだけではなく、自分が高校2年生の時に経験した阪神淡路大震災の影響の記憶と結びついてしまっているのではないかということに気がついた。自覚することで切り離して考えることができるようになったのは、ラウンドテーブルのおかげである。

これからも続いていく予測困難な時代に、どのような学校であれば生徒たちのキラキラした姿を多く引き出すことができるのだろうか。協働を心掛けながら探究し続けたい。

コロナ感染症と乳幼児教育／保育の営み

学校改革マネジメントコース2年／さくら認定こども園 伊藤 康弘

はじめに

新型コロナウイルス感染症（以下新型コロナ）の蔓延と園運営と3月からの私の気づきと合わせて報告する。

新型コロナ蔓延という VUCA が目の前にきた

2月から始まった新型コロナの蔓延は、世界中に広がり、まさに虚構の世界が、現実の世界を浸食しているように思える。さらにコロナ危機を契機として、大きな渦が世界の国々で発生している。まさに VUCA¹⁾に直面している。教育改革や保育を変えようという研

修会で枕にされることの多い言葉である。私は当事者意識なく VUCA のことを聞いていた。しかし新型コロナによる社会の有り様の変わり方は、まさしく VUCA である。VUCA の当事者ではないか。また思いもしなかった社会的な基盤に理不尽な向かい風を吹かせて、思わぬ影響が隔々にでていることに気がついた。新型コロナは、日本の色々な分野の特定の側面を剥がして、物事の本質をむき出しにする。そして危機的事態に立ち向かう人々の営みを見せてくれる。その営みは、私を勇気づけてくれるように思う。

私が関係している病児保育の話。5月のある夜 ZOOM で全国病児保育施設協議会²⁾の安全管理委員会があり、色々な県の小児科の先生と ZOOM で会議をした。その後、ビール片手に(私はノンアル。信じてもらえないかもしれないけど)意見交換会をした。小児外来の先生数人にお聞きしたところ、例外なく、4月の外来者数は、1年前の同月の1日の患者数より少なく、併設の病児保育施設の利用者数はゼロに近いと。また「こんなに感染症に依存していたかと気がついた」と。乳幼児は、感染症に罹患しては免疫を獲得し、交差免疫な体を作っていると言われている。ワクチン接種も同様。自粛期間中はそれが無くなったという。日本の小児外来と病児保育の基盤が崩れていくのではないかと思った。小児外来・病児保育は、私達の乳幼児教育／保育の営みを支えている重要な基盤だと考えているから、思わず淡々と医療現場で子どもたちを守ってくださる小児外来の先生方にエールを送ってしまった。

次の例は、5月30日の日経新聞社主催の教育ウェブナー³⁾での、工藤勇一先生⁴⁾と日野田直彦先生⁵⁾のパネルディスカッションである。たくさんの気づきを得た興味深いものであった。曰く「新型コロナは、日本の教育の問題を明らかにした。教員が頑張りすぎて、いつも誰かがサービスして、生徒はいつも待ちの状態になっている。つまり生徒が当事者意識のない状態になっている。だから自粛期間中にすることがない生徒がたくさんいて、たくさんの宿題を出している。」「ICTを使った授業を開始しようとしたら、ICTインフラの不備が学校や家庭で明らかになった。日本がこんなにも遅れているのかと思った。」「オンライン授業が当たり前の時代になった。知識を教えることはAIプログラムが得意で1人1人の理解に合わせてカリキュラムを動的に組み換えができる。教師の役割は知識を教えることではなく、生徒1人1人に寄り添うメンター(精神的共感者)やファシリテーター、コーチになるのだろう。」

お聞きしていて、2つの疑問を持った。1つ目の疑問、教師の役割であるという、メンターやファシリテーター、カウンセラー、コーチの役割は、突き詰めると、宗教者に行き着くと思っている。遠い未来には、教育者は宗教者になるのだろうか？

2つ目の疑問は、オンラインの幼児教育／保育の可能性はあるのだろうか？密な子ども集団の中で、社会性とか社会情動的スキルと言われる資質・能力の根っこを形成していく幼児教育は、3密を避けるとか、マスク、社会的距離というコロナ対策と相反する要素がある。そう単純なことではないだろう。

リーダーは決して危機を無駄にしてはならない。

コロナ感染症が広がりつつある時に、最初に頭に浮かんしたのは、「リーダーは決して危機を無駄にしてはならない。」⁶⁾という言葉であった。この機会に、ご家庭と園の距離感を短くできないか。「つながり」ができないか。それが園への強い信頼・信用形成につながられるか。また懸案となっていた行事改革、特に生活発表会のあり方を意義や職員負担の面から、改善できないか。園生活に慣れない子どもと保育者の濃い関わりを通して園生活に慣れてもらえないかなど、考えたことは多々あったが、実践できたことは少なかった。

自粛期間中に、園生活に慣れない(新入園児だったり、進級に慣れていない)子どもと日頃はできない密な関わりで、子どもとの強いつながりができたところ職員が楽しそうに報告してきた。一方で登園自粛していた子どもとの新たな関係づくりは時間がかかるし、と懸念していた。

自粛解除から1ヶ月が経過して、各クラスのプロジェクトも起動に成功したように感じている。6月末には2ヶ月の遅れを物ともせず、各クラスからのプロジェクト報告が上がってきている。私は、職員の安定した保育スキルに逞しさを感じる。以前なら職員が、「園長先生、教頭先生。困りました。」と事務所に飛び込んで、無理難題であることを主張していた風景が消えていることに気づいた。

教頭先生と話し合ったのは、12月末の生活発表会のあり方であった。生活発表会は4月からの8ヶ月後の子どもたちの姿を保護者に見てもらい、子育ての楽しさや喜びを確認する重要な行事である。生活発表会の当日は、200㎡のホールに200人以上の大人が集まる、究極の三密空間を形成する。教頭先生と、三密を解消するためには、保護者の参観を取りやめて、録画したビデオをWebから鑑賞できるようにするか、即時のライブで流すしかないということになった。5歳児クラスの保護者からは、最後の発表会な

ので、是非生で参観したいと要望を受けている。合意形成には時間がかかりそうだ。

登園自粛期間中の新しい試み

長期間登園自粛をしている子どもたちの育ちが気になっていた。4月の入園式に登園しただけで、登園自粛をしている子どもたちの育ちへの影響も気になっていた。また私は、4月入園の子どもたちの保護者が園への興味を失うことを心配していた。

4月18日に教職大学院のZOOM接続テストのカンファレンスを体験した。その新鮮な経験を教頭と共有していて、ZOOMによる保育ができないかという提案があり、即時にSNSで保護者にZOOM保育を当日午後実施する案内を出した。保護者と子ども5組の参加を得てZOOM保育を楽しんでもらえた。30分の時間の中でイタリアのコロナ童話⁷⁾を読み、保護者が「WashYourHand」という英語の歌を歌い、楽しい40分だった。次の1週間、ZOOM保育を20分/クラスを毎日実施することにした。教頭から月曜の朝、職員に伝えてもらったら、面白そうという職員が何人かいた。否定的な意見が出るかと思ったが、面白そうと付いてきてくれた。毎日数組から15組の子どもと保護者の参加があり、保護者には好評であった。朝の挨拶、名前を読んで保育者と子どもの会話、歌と一緒に歌ったり、絵本と一緒に楽しんだりした。子どもたちは恥ずかしがり、姿を隠して声だけ参加も多かったが、最終日には慣れた子どもも多かったように感じた。

5月の連休に入る前に、子どもたち全員にお手紙を出した。「お元気ですか。もう少しでさくらに出来るよ。」というメッセージを伝えた。保護者から同封の塗り絵を子どもが如何に丁寧にぬってくれて、塗り絵を大事にしていると聞いた。このような些細なことでも、子どもたちは園やお友達とのつながりを大事にしてくれていることに、1人1人の顔が思い浮かび、ありがたかった。

平時には、情報伝達の基盤として、保護者のスマートフォンでSNS網を作っておいたことは無駄ではなかったと改めて思う。保護者との連絡網の整備は、電話、SNS、お手紙と複数のチャネルを持つことが重要で、その整備にコストと時間を取られ続けるけれども、疎かにしてはならないと考えている。

6月のラウンドテーブルに子どもたちと参加する

木村優先生と福島昌子先生のご厚意で、6月20日に開催されるラウンド・テーブルのゾーンEに参加するお誘いを受けた。ZOOM経験のない子どもたちが、小中高生たちと交流してどんな思いを持つか興味があり参加をお願いした。ワクワクする試みに参加したいという私の気持ちも強かった。

5月26日、6月2日、6月9日のプレセッションを経て、参加者の5歳児2名は、小さい声だけど名前と今日の遊びを言えた。福島先生から「生徒達の声が自信がないことを話す時のように、小さな声で通じない。ZOOMによるセッションは、声が8割、画面の向こうにいる人に伝わるように大きく、ゆっくり話すように直したほうが良い。これは指導して練習して直したほうが良い。」と助言を聞いた。担任は子どもたちに、同じように説明して、名前を言う練習をしたようだ。私自身も同様に感じていたので、今後注意しようと反省した。

担任と話し合いの結果、ゾーンEのポスターセッションで、「海プロジェクト はじまり・現在・これから」というタイトルでポスターセッションを行うことになった。当日当園の5歳児2名と担任のポスターセッションを聞いて、同じグループの高校生から探究の原点が幼児教育にあることを理解したと感想を聞き、有り難かったと同時に、責任の重大さを感じた。3月からのモヤモヤが吹き飛ば一瞬でもあった。

- 1) Volatility 変動性、Uncertainty 不確実性、Complexity 複雑性、Ambiguity 曖昧性の略語
- 2) <https://byoujihoiku.net/>
- 3) Webinar. Webで行う講演会。
- 4) 元千代田区立麹町中学校校長、現横浜創英中等学校校長
- 5) 元大阪府立箕面高校校長、現武蔵野大学附属中高校校長
- 6) ラーム・エマニュエル元オバマ大統領の補佐官
- 7) 『好奇心をもった男の子と女の子のための銀河コロナウイルスガイド』（翻訳：藤田寿伸）
<https://hanatsubaki.shiseido.com/jp/now/7549/>に解説がある。

教職大学院2年目を迎えて

学校改革マネジメントコース2年／福井県特別支援教育センター 大石橋 義治

新型コロナウイルス感染拡大防止のため「新しい生活様式」の構築が求められています。特別支援教育センターにおいては、3月から続いた学校の休校、集合型研修の自粛等で業務の見直しを余儀なくされました。当センターの業務の柱の1つである園・学校を訪問しての教育相談は、3か月間の休校期間は中止となりました。しかし、その間も学校や保護者から相談の依頼があり、その対応方法をセンター内で考えました。その結果、学校とは遠隔会議システムを使って、話し合いや支援会議を行ったり、保護者とは、感染予防を徹底した上で、来所相談を行ったりしました。子どもが不在の教育相談に戸惑うこともありましたが、先生や保護者の思いを確認できる機会となりました。また、もう1つの業務の柱である、研修については大きな変更と見直しを行いました。毎年実施している、県内外の講師を招いての研修講座(13講座)は、4月の段階で中止としました。多くの講座が参加人数100名を超える集合型の研修であることと、多くの県外の講師を依頼していることがその理由でした。また、特別支援教育コーディネーター養成研修などその他の研修については、中止としたものもありましたが、遠隔会議システムを使って受講者の学校とつないで行ったり、センター所員が作成した研修の動画をアップし、受講者に視聴してもらったりして対応しました。このような対応は、どの所員も初めての経験であり、どれが正解なのか誰も分からない状態でした。しかし、全所員で知恵を出し合い、今できるベストな対応を考えた日々は貴重な経験となりました。新型コロナウイルスとの共生は始まったばかりです。コロナの時代の新しい特別支援教育センターを模索する日々は続いていきます。

さて、教職大学院2年目を迎え、これまでの自分の実践をまとめる一年がスタートしました。実践の大きなテーマは、センターが数年前から重点課題に

挙げている「学校支援」です。学校支援とは、「当センターの教育相談事例を学校全体の課題として共有し、学び合いながら、先生方一人一人の子どもへの理解、授業づくりや学級経営に反映できることを願うものである。つまり、当センターが考える学校支援とは、支援が必要なすべての児童生徒に対して、管理職や特別支援教育コーディネーターが中心となり、学校自らが組織的に子どもや担任を支え、学校が行う特別支援教育のビジョンの遂行と体制整備に当センターが協力する」とされています。センターに勤務して4年目を迎え、ようやく学校支援とは何かを少し理解できるようになってきました。しかし、毎年実践を振り返ると課題が見つかります。

昨年度の実践は、通常の学級と通級による指導との連携のあり方について、その課題を明らかにし、特別支援教育コーディネーターと協働しながら、対象児童の見立てや支援の共有を図ることができる方策について考えました。その結果、学級担任と通級指導担当者とは、対象児童の見立てや支援方法を共有する仕組みとして、それぞれが参加できる支援会議の設定や、お互いの指導場面を参観し合うことができる機会をもつことが有効であることを特別支援教育コーディネーターと共通理解することができました。また、教職大学院での合同カンファレンスにおいて他校の先生方からは、「自分の学校においても同様の課題があり、今回の実践を参考にしながら取り組んでみたい」「連携を図る仕組みづくりには、管理職の役割も大きいのではないか」という意見をいただきました。また、課題として今回の実践を校内や他校に広げていく方策について考えていく必要があると感じました。そこで今年度は、管理職、特コと協働しながら通級と学級とで一貫した指導を行うための連携について学校全体で共有できる校内支援体制のあり方について実践を展開していきたいと考えています。



6 月ラウンドテーブルをふり返って

実践研究福井ラウンドテーブル 2020 に参加して

授業研究・教職専門性開発コース 2 年／

(福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程) 井上 尚紀

ラウンドテーブルの醍醐味は、思いがけない出会いと学びにあると思っています。初めて福井ラウンドテーブルに参加したのは、5 年前、学部 1 年生のころでした。授業の一環としての参加だったのですが、高校生から大人まで、教員や公民館の方、NPO 法人の方等普段大学では得ることのできない、新鮮な学びの場だったことを覚えています。今回のラウンドテーブルはオンライン上ということで、更にその多様さが広がったように感じています。

20 日、私はゾーン D 授業研究に参加しました。海外参加シンポジスト 2 名の学校では、家庭学習等休校期間中の学習の保障、テクノロジー活用時の課題等の問題があったとのこと。福井大学附属義務教育学校 澤本先生からはコロナ禍における福大附属前期課程の実践共有がありました。新型コロナウイルスによる教育の混乱により日本に限らず海外も同様の課題を抱えていたこと、それぞれの環境でできる最善の努力が為されていたことを知ることができました。新型コロナウイルスの蔓延は、社会が変化していく大きな特異点に当てはまると思います。「社会の変化に適切に対応する」ことが教師の資質・能力には不可欠だといわれています。福井県安居中学校長牧田先生によるまとめでは、自分(たち)ができる教育活動を全力で取り組むことが「社会の変化に適切に対応する」教師なのではと考えさせられました。

21 日、グループセッションに参加し、昨年度長期インターンシップでの学びを共有させていただきました。自身の実践を言葉で共有し、聞き手の先生方から様々なコメントをいただくことで、自身の実践の新たな価値づけを見出すことにつながりました。実践共有の一場面にて、「身近な自然現象や環境の変化等、常にアンテナを張りつつ、子供の学びを支えていけるような引き出しを増やしていきたい」と今後の意気込みを述べるがありました。それに対し福島大学教職大学院の佐藤先生からは、「10 年前に行っていた授業をしようとする、なかなか今の子供たちにはそぐわないことがほとんど。10 年前と今の社会は全く異なっていて、その変化に教師自身がアンテナを張り続け、新しいものを作っていくことが求められているのでは。」という旨のコメントをいただきました。特定の教科に限らず、社会と子供たちとのつながりを踏まえた教育活動を行っていくことの視点をいただきました。

アメリカやフィリピンの先生方によるシンポジウム、福井県内外の先生方とのセッション。「社会の変化に対応」した、オンラインという形で行われたからこそこの機会だったと思います。様々なイベントが中止されていき、不安もあった中の開催でしたが、コロナ禍だったからこそこの出会いにより、より一層の学びを得ることになった 2 日間となりました。

予測困難な時代

授業研究・教職専門性開発コース 2 年／

(福井大学附属義務教育学校後期課程) 石田 涼

2020 年 2 月 28 日、新型コロナウイルスの流行拡大を防ぐために全国の学校に休校措置が命じられた。私はもちろんであるが附属義務教育学校の先生方や教員の両親も初めての事態で、来年以降学校の授業、部活動がどうなるのかが全く分からない状況だった。卒業式も規模を縮小しての開催、離任式、大学院の修

了式の中止と 1 年間お世話になった 9 年生のみなさん、お世話になった先生方に直接感謝を伝えられる場がなく、1 年間の節目の季節を例年通り過ごせなかったのは非常に残念であった。

私たちは休校期間中に M1 から M2 となり、カンファレンス運営を進めてきた。3 月中は、コラボレーシ

ョンホールに集まり 4 月からの進め方について議論してきたが、4 月になり緊急事態宣言が発令されると大学に集まることすら難しくなった。そんな中、Zoom を使い運営会議を進め、運営会議だけでなく、週間カンファレンスや月間カンファレンス、そしてラウンドテーブルもオンラインで開催された。オンラインの開催は、自宅から参加できるため遠方の方とも、Zoom を通してつながることができる。ミドルリーダー、マネジメントコースの先生方には福井県外の先生も多く在籍されており、ある先生は「いつもは福井まで行かなくてははいけないけれども、自宅から参加できるのでありがたいです」とおっしゃられており、これまでなかった新しい扉が開いたような気がした。しかし、オンラインを通した試みが苦勞した面も多い。M2 運営面では、それぞれが進路のこと、大学のことなどそれぞれがあらゆる負担を抱えていることを考慮し、何度も M2 で話し合っただけでそれぞれの役割を決めてきた。しかしそれでも、連絡がうまく取れないこと、認識の行き違い、スケジュールが合わないこと、個人の負担が極端に重くなってしまうこともあった。また、M1 のみなさんとはまだ全員と直接会うことができていない。そんな中 M1 のみなさんは、週間カン

ファレンスやインターンシップに取り組んでいる。その中で、共有しきれない疑問や不安がたくさんあるかもしれない。初のオンラインでの試みを通して、様々なことを経験してきたがまだ発展途上である。これからの取り組みもうまくなかったこと省察し、常に学び続ける姿勢をもち活動に取り組んでいきたい。

この休校期間中は私自身、改めて専門教科である社会科の重要性を実感した。予測困難な時代を生き抜くために学習指導要領は転換してきたが、まさに私たちは今、予測困難な状況に立たされていると言っても過言ではないだろう。未知のウイルスと戦うために歴史を学んで、ペストやスペイン風邪など今回のようなパンデミックを人類はどのように乗り越えてきたのかを知ることがこの状況を乗り越える 1 歩となるかもしれない。現実の社会を多面的・多角的に見る視点で考察し、そこから何が重要なのかを考える力は予測困難な時代を生きるために必要になってくると考えている。現実社会を生きていける資質・能力を育成するための社会科を探究し続けたいと思う。

ラウンドテーブルの学び

授業研究・教職専門性開発コース 2 年／(明新小学校) 吉田 聖

今年もラウンドテーブルの季節がやってきた。しかし、今年のラウンドテーブルはいつもと違っていた。本来であれば様々な分野の人たちが福井大学に集まり、自分の興味がある zone の話を聞き、二日目には顔を合わせて様々な実践をしてきた人の話を聞いたり、自分の実践について話したりして、みんなで語り合い、学びを深めていくものだったが今年に関しては実際に顔を合わせて行うことはできなかった。理由は明白でコロナの影響である。だからといって中止にするということは無く、Zoom を活用した新しい形での開催となった。

Zoom を活用することによって、国外の先生ともつながることが可能になった。そのため、一日目のシンポジストの中には海外の先生からのコロナの状況下での学校の対応についての報告を聞くことができた。しかし、私自身は英語ができるわけではないので聞くことが困難だった。チャット機能では翻訳も流れてきていたが、読み取るのに時間が掛かり、去年のラ

ウンドテーブルより神経を使った。それが二人分もあったため、疲れもひどかったように感じる。これから先、また zoom を活用してラウンドテーブルを行うことがあれば改善していったほしい部分ではある。

二日目は、実践の報告を行った。私は去年のインターンでの学びについて報告をさせていただいた。その中で、教材研究の大切さを実感した事例を報告したときにふと思ったことを聴き手の方々に質問をした。内容は「現職の先生方はいつ、どのように教材研究を行っているのか。」ということだ。先生方の答えの中には日々、様々な業務に追われやる時間を見つけてるのは難しいとおっしゃられていた。しかし、それでも合間の時間を見つけ少しずつ行いそれを日々積み重ねていっていると答えてくださった。またそんな日々を過ごし少しずつ積んできた経験が今の授業作りに生きている。だから若いうちから少しずつ、そしてしっかりと教材研究を行った方が良いとご助言をいただくことができた。このセッションの中で私

はただの報告で終わらせるのではなく、自分の学びを深めることのできる話し合いをすることができた。それは実際に顔を合わせて行うのも画面越しで行うのも変わらないのである。しかもその話し合いを緊張した雰囲気の中で行うのではなく自分たちの過ごしやすい環境の中で、柔らかな雰囲気の中で行うことができた。これは zoom を活用する上での利点となるだろう。

今回のラウンドテーブルは本来とは違う形ではあったが、それでも学びの多いラウンドテーブルとなっただろう。それは自分の学びの面だけではなくラウンドテーブルの可能性を広げること、また教育の可能性を広げる面でも学ぶことが多かったと感じている。

共に学びあい、今、想うこと

ミドルリーダー養成コース2年／報徳幼稚園 竹澤 尚美

最近のパンデミックにより、日常の生活は一変しました。当たり前が当たり前でなくなったこの現状に右往左往することなく、前向きに進もうとする方々のパワーに、勇気をいただくと共に、今、私ができることを考えた時でもありました。先生方が zoom の環境をいち早くご用意してくださったことにより、月間カンファレンス、ラウンドテーブルと、今年度も初めてお逢いする方々とのご縁を感じながら、いろいろな違った角度から学ばせていただくことのできる学びの大きさ、深さに感謝しております。

1年間の学びを終えて、今後の展開、そして、長期実践報告の作成に向けての軸を考えた時に、幼稚園での自分の位置づけや意味づけ、その中で自分ができることを捉え直していききました。そして、カンファレンスの中での先生方の話を拝聴しながら、その想いは、私の心の中で少しずつ膨らんでいくような気がしました。カンファレンスでは、先生方、参加した方々からいつも前向きになれるようなヒントやアドバイスを頂くことができます。それは、幼児教育という枠に捉われないいろいろな先生方の人間味、人間としての生き様に触れ、一緒に考えて答えとなる感情を導いてくださっているからだと思います。ラウンドテーブルでは、教育実践の場で学んでいる方々だけではなく、いろいろな専門の方々とご一緒させていただき、その中で得られた知見はとても貴重なものでした。

また、安居中学校の牧田校長先生の話の中に、「不可能を可能にしていける。学級、学校の枠を取り払って

いろいろなところで繋がりができていく時代である。変化を楽しむ。全然知らない人とかかわることを楽しむ。人ができないことを自分がフォローしていくことを楽しむ。問い直して、新たな歩みを進めていこう」というものがありました。人と人との繋がりの中での自分の立場を考えた時に、この「フォローしていくことを楽しむ」という言葉の大きさが心に突き刺さりました。「他者と働く」という言葉の深さにおいて、対話（新しい関係を構築すること）の重要性、自分の思い描く枠組みの解釈をどこまで柔軟に自分の中で処理できるか、相手の想いをどこまで自分の中に見出すのかということが、自分の殻を破り、他者と働く中での協働性を生み出していくことであるとの理解を強く思いました。

そして、教育実践の場には、同僚だけではなく、未来を創る子どもたちがいます。子どもたちの主体性、教師の主体性、そこを共に考えていくことこそが相乗効果による大きな力となり、生きる力が培われる源になって、根底に存在するものだと思います。

今回のセッションの中においても、「主体性」という言葉がたくさん聞かれました。「何気ない日常をチャンスに変える」子どもたちの主体性について、この時にこそ立ち止まり、今一度考えてみる、そのようなチャンスをいただけたように思います。

自分の歩んできた想いを言葉にしながらか、また、そこにいろいろな方々の想いを聴いて組み込んでいき、今後もさらに自分自身邁進していきたいと思ひます。

5 月合同カンファレンス、6 月ラウンドテーブルに参加して

学校改革マネジメントコース 2 年／和田こども園 嵩谷 浩太郎

教職大学院に入学して 2 年目となりますが、私にとって 5 月の合同カンファレンスは、冬期集中講座以来、久しぶりの参加となりました。というのは、年度末の仕事に追われていただけでなく、長男の結婚式の準備（結果、残念ながら中止となりました）、長女が名古屋で就職するための引越、次男が大学へ進学するための東京への引越と公私ともに多忙な日々を送っていたところ、更に新型コロナウイルス感染症による緊急事態への対応に直面し、かなり追い詰められた状況にありました。当たり前のように子どもたちと過ごしていた日常生活からコロナ対策を講じた新生活様式への変更をどうしていくか。子ども達の成長した姿を見て頂くために例年年度末に行われていた保育参観、そして修了式や茶話会の開催をどうするか。また、新年度の入園式から始まる様々な年中行事を如何に計画していくか等々、矢継ぎ早に判断や決断を迫られる毎日でした。しかし、誰もが正解の分からない前例踏襲の判断や決断もできない状況の中、それぞれ各担当の職員と話し合いの場を持つことにより、私の独断でトップダウンによる決定をすることなく、当園で今できることをみんなで考えていきました。そして、5 月の合同カンファレンス、6 月のラウンドテーブルでは対面での交流は断念され、オンラインでのグループセッションが行われました。5 月の合同カンファレンスで戸惑いながらも zoom を初めて体験し、6 月のラウンドテーブルではオンラインでも交流を深めることが出来ることを体感するとともに、オンラインだからこそその良さも感じる事ができたセッションとなりました。

5 月の合同カンファレンスでは、坪川修一郎先生の「語り合いから始まる学校改革～支援体制システム構築を通しての気づき～」を読ませて頂き、当園において今取り組んでいることとオーバーラップする点が多々あり、自分自身の実践を振り返り論理的に整

理することが出来ました。6 月のラウンドテーブル 1 日目は、Zone C のコミュニティ「持続可能なコミュニティをコーディネートする」に参加させて頂きました。地域を超えた 113 名によるオンラインを用いた画面上でのコミュニケーションは、まさに時空を超えた新しい体験でした。オンラインだからこそ、気楽に参加しやすかったり、大胆な質問が出来たりすることもあり、オンライン交流に対する苦手意識が和らぎました。また、2 日目には私自身の実践を話す機会を頂き、自分の思いを語っていく中で、自分が潜在的に考えていることを振り返り、そして新しいことに気づかせて頂きました。私の実践が子ども達や職員に対してどのような影響を与え、モノの考え方がどのように変化しているのか、心の変化を見て取りながら、追っていきたいと思います。教職大学院でのコミュニケーションを通して、「人に話して腑に落ちること」「言葉にしてみても見えてくること」の大切さを改めて実感しております。

そして、私自身のコロナ対応においても、「話し合うこと」「語り合うこと」の大切さを日々実感している次第です。コロナ禍での結婚式や引越しについて家族間で話し合い、園の行事や子ども達の生活様式の変更については職員と知恵を絞り合い対応を考えました。教職大学院では自分たちのその取組を語り合うことで、新しい手掛かりを得ることが出来ます。コロナ禍の閉ざされた状況下でも、様々な決断を一人で背負うことなく孤独感を味わうこともなかったことは、私を取り巻く周囲の方々のおかげであり、感謝の気持ちで一杯です。そして最後に、コロナ情勢の大変な中で、教職大学院における学びの機会を失うことなく、双方向のコミュニケーションを可能にするための準備と運営に携わって頂いた先生方に深く感謝致します。今後ともよろしくお願い致します。

令和2年度 教員免許状更新講習 ― 県と大学との協働4年目 ―

教員免許更新制は教育職員免許法第9条の3に基づき、平成21年4月に始まり、全国の大学等で教員免許状更新講習として開設されました。今年度で12年目を迎えますが、10年に一度巡ってくる講習ですので、ちょうど2サイクル目が一昨年度から始まったところです。

ここ数年来、現代社会では「知識基盤社会」「少子高齢化と人口減少」「A T・情報ネットワークの推進した社会」「貧困化」「グローバル化」「ダイバシティ化した社会」といった課題が顕著になり、現在の子どもの活躍する10～20年後の近未来すら予測することが困難な社会であると言われてしています。こうした社会を生き抜くには、主体的に、他者と協働しながら多面的・多角的視点を持ち、深く考えながら課題に取り組んでいく資質・能力を培うことが大切です。そこで、まずはその子どもたちの教育にあたる教員こそが、その資質・能力の向上を図ることが肝要と考えます。

そこで、福井大学（以下、本学という）では、受講者の先生方に満足いただけるよう、毎年度いずれの分野・領域でも創意工夫に富んだ講座を積極的に開設してきています。特に福井大学連合教職大学院（以下、本学教職大学院という）では、開設当初から「新しい時代をひらく教師の実践コミュニティ―実践の経験と知恵を共有するために語り聴き・読み綴る―」をキーコンセプトに、本講習を実施してきました。

本講習プログラムは、そうした教員の資質・能力を向上し、学び続ける教員を生涯支えることを目的に設計されました。特色としては、これまでの本学教職大学院のスタイルを引き継ぎ、次のように行っています。

- ①本学教職大学院の教師教育のノウハウを生かして、「実践・省察」を重視した講習にしていること
- ②少人数による話し合いを基本とし、そのグループ構成は校種、年齢、地域、教科等の枠組みを解いたものにしていること
- ③必修領域「教育実践と教育改革Ⅰ」6時間に、選択必修領域である「教育実践と教育改革Ⅱ」の6時間、選択領域である

「教育実践と教育改革Ⅲ」6時間を加えて、連続3日間の計18時間で一括りとする講習を提供していること

具体的にみると、1日目は受講者自らの教育実践をまとめたレポートの報告から始まります。実践の経験を交流し課題意識を共有するため、グループのメンバーで語り合い・聴き合いを行います。その後、国の教育施策や世界の教育の動向、子どもの変化と発達について、最新の知見を学び、午後からはグループ内で 今後の実践に向けての展望を考えながら、優れた実践事例資料を読み深めていきます。2日目は、年代別に3コース（「授業づくり」「気になりな子どもへの支援」「学校マネジメント」）に分かれ、国の動向や学校を巡る近年の変化や気になりな子どもへの支援を学びつつ、テーマと関連する優れた実践事例を1つ取り上げて考察し、各自レポートにまとめます。その後、コース・年代・校種を交えた新たなメンバーで構成されるクロスセッション（報告会）を行います。3日目は教師としての自らの歩みを振り返り、今後の展望を拓く目的で、2日目のレポートに自らの教育実践を加筆したものを完成させ、再び、新たなメンバーとのクロスセッションで報告しながら省察を深めていくという流れです。

こうした講習を続ける中で本学教職大学院では、多くの先生方にこの学びを10年サイクルで経験していただくことが、学び続ける教員をサポートすることにつながると考え、理論と実践の往還を重視してきました。この理念を福井県教育委員会（以下、県教委という）に御理解いただき、平成29年度からは共催で講習を実施しています。さらに、働き方改革として教員の負担を減らすということもあつて、福井県教育総合研究所（以下、県教育総合研究所という）が行う中堅教諭等資質向上研修8日間のうち3日間を本講習と兼ねることにもなっています。

改めて、県教委との共催として本講習が悉皆の研修となったことは、本学教職大学院での学びを県内の公立学校のすべての教員の方々に経験していただけるようになり、本学としては、地域に貢献する大学として確かな手応えを感じております。また、受講者の皆様にとっては、必修講習、選択必修講習、選択講習の3日間、計18時間分の受講料を福井県が全額補助していただいていることで負担軽減になりました。さらに、県教育総合研究所で一度に申し込みができることで、手続きが簡便になったことも大きいと考えます。

本学教職大学院では、事後評価アンケート等から受講者のニーズや要望をしっかりと受け止めながら、実際の教育現場での実践に大いに活かせるよう充実した講習とするため、県教委と協議しながら内容の吟味と丁寧な運営を心がけています。本年度も、これまでの教師としての実践の中で大切にしてきたこと、試行錯誤しながら取り組んできたこと、そして、その中で考え悩んできたことなどを語り合い聴き取りながら、さらには実践記録の展開を読み深め自身の実践を綴る中で、新しい時代の教育への展開に視界をひらいていく講習をデザインしました。互いに共有した実践や経験が一人一人の先生の財産となれば幸いです。

講習の詳細については、以下のとおりです。本年度は、オンライン会議システム（Zoom）を用いた同時双方向型の遠隔による講習（講義及びグループ協議等）を行う予定です。オンラインで本学教職大学

院が大切にしてきた講習内容を実現するために、4月以後の本学教職大学院では、カンファレンス準備会、そして5月の合同カンファレンス、6月20日と21日のラウンドテーブルの取組を通して、試行錯誤を重ねてきました。さらには、県教育総合研究所や県教育庁教職員課との協働により、オンラインセッションのための機器やネットワーク環境の調査、それに伴い受講会場を職場や自宅とする柔軟な対応、Zoomによる免許状更新講習受講マニュアルの作成、事前の接続テストの計画と実施（7月下旬の予定）など、講習の実施に向けた準備を着実に進めております。

いよいよ1ヶ月後、コロナ禍の中で、オンライン会議システム（Zoom）を用いた同時双方向型の遠隔講習に挑みます。皆様の御協力をよろしくお願いいたします。

対象の職種 福井県採用の教員で、現在国公立の学校に勤務する者

（教諭、実習助手、寄宿舎指導員、栄養教諭、学校栄養職員、養護教諭）

講習名 教育実践と教育改革Ⅰ（教育の最新事情①）・・・・・・必修講習部分（1日間）

教育実践と教育改革Ⅱ（教育の最新事情②）・・・・・・選択必修講習部分（1日間）

教育実践と教育改革Ⅲ（教育の最新事情③）・・・・・・選択講習部分（1日間）

日程・会場 ①令和2年 8月 4日（火） 8月 5日（水） 8月 6日（木） 3日間とも受講者の職場・自宅

②令和2年 8月18日（火） 8月19日（水） 8月20日（木） 3日間とも受講者の職場・自宅

③令和2年12月26日（土）12月27日（日）12月28日（月） 3日間とも受講者の職場・自宅

※本年度は、オンライン会議システム（Zoom）を用いた同時双方向型の遠隔による講習（講義及びグループ協議等）を行います。

※詳細は、福井県教育総合研究所ホームページからお願いします。（教職大学院 血原 正純）

【編集後記】今回の執筆者の皆様は、締め切り前の週末がラウンドテーブルというスケジュールのなか、原稿を提出してくださいありがとうございました。オンラインでのラウンドテーブルの実施ということで、参加者の皆様も運営側も、心配や緊張があったかと思います。でも、今回お寄せいただいた記事から、このような状況の中でも（だからこそ）、オンライン上で対話を通して学びつながれたことの大切さを実感しました。7月の合同カンファレンス、その後は、夏の集中が始まりますが、どうか皆様ご健康にはくれぐれも留意してお過ごしください。（ニューレター編集委員会）

教職大学院 Newsletter **No.137**

2020.8.1 内報版発行

2020.8.1 内報版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp